

# 九州大学総合研究博物館年報

Annual Report of the Kyushu University Museum

## 第4号

2009-2010年度

2012年3月

九州大学総合研究博物館

The Kyushu University Museum

## はじめに

九州大学総合研究博物館館長 竹田 仰

九州大学総合研究博物館の2005～2009年度の活動状況に対して、翌2010年度に外部評価委員会を中心に、博物館の使命と役割、博物館活動、管理と運営、財政、施設と設備、将来構想と将来計画、中期目標と中期計画、点検と評価の広範囲にわたって担当委員を決めて評価を実施した。これにより、2000年4月1日に九大博物館が発足して第2回目の外部評価が行われたこととなる。従って今回の研究報告の2009-2010年度版は、博物館創設期の10年の最後の年度と次の新たな10年がスタートする初年度とにまたがっている。つまり10年一区切りの総括と展望を含んだ号と言える。

この評価報告書は2011年8月に発行されているが、それによると外部評価委員会での評価が低かった項目は以下のとおりである。まず、博物館活動では(1)社会教育と学校外教育への貢献、(2)海外研究者との交流と共同研究、(3)外国人研究者の受け入れに関する項目であった。これについては、積極的な取り組みが要請された。管理と運営では、(4)移転へ向けて早急な事務体制の整備、(5)教員の配置に関する将来を見据えた検討が不十分で館内の合意形成が必要であることが指摘された。施設と設備に関しては、(6)標本資料を収蔵し、整理し、教育と研究への活用を支援するためには相応の施設と設備が必要であることを学内外に訴え、大学当局の理解と支援を得る努力を行うことが重要であることが指摘された。さらに、将来構想と将来計画に関しては、(7)移転を間直に控えた現在、事業部構想よりも優先させるべき活動にエネルギーを傾注すべきであるという指摘があった。これについては、館内で検討を行い、今後の活動方針を決める必要があるとした。一方、その他の項目は何れもBランクであったが、その中で比較的高い評価(>4.0)を得たものとしては、(1)第1分館展示、(2)ホームページ、インターネット博物館、(3)学芸員資格関連授業と実習等の教育、および教育支援、(4)福岡市少年科学文化会館との連携などであった。

このたび2009-2010年度の年報をお届けするに当たり、博物館に関する組織、事業、専任教員の研究活動、施設などについて項目ごとに分類して簡潔にまとめてあるが、これは5年の評価期間の最後の一年を含んでいる。館員の努力とその成果が先の評価に十分に反映されているとは言い難いが、本報をまとめている2011年度の現時点では、多くの指摘事項に関して改善されてきていると思われる。この中には館員では改善するに難しい大きな課題もあるが、外部評価委員の評価は、やはり良きにつけ悪きにつけ我々館員の日々の活動に関しての客観的なバロメータとして尊重しなければならない。その意味においても館員が力を合せて、年度ごとに各自が掲げる目標を高く設定し、その達成についてまず各自が自己分析・評価する必要がある。例えば、九大博物館の標本資料が企画展示に十分に活かされると共に、展示に至るプロセスを教育の場として学生を巻き込みながら作り上げ、それを博物館学的な研究にも繋がるようにすれば外部評価もさらに高まると思われる。

## 目 次

### I. 博物館の2009～2010年度の活動—総括と分析—

|                            |    |
|----------------------------|----|
| 1 教育に関する目標を達成するための措置 ..... | 4  |
| 2 研究に関する目標を達成するための措置 ..... | 7  |
| 3 その他の目標を達成するための措置 .....   | 12 |

### II. 組 織

|                            |    |
|----------------------------|----|
| 館長 .....                   | 15 |
| 運営委員会委員 .....              | 15 |
| 研究部（2009～2010年度） .....     | 16 |
| 事務部（2009年度～2010年度） .....   | 16 |
| 資料部（2010年度） .....          | 16 |
| フィールドミュージアム部（2010年度） ..... | 17 |
| 協力研究員（2009、2010年度） .....   | 18 |
| 専門研究員（2010年度） .....        | 18 |

### III. 事 業

|                        |    |
|------------------------|----|
| 1. 展 示 .....           | 19 |
| A. 常設展示 .....          | 19 |
| B. 平常展示 .....          | 19 |
| C. 公開展示 .....          | 19 |
| D. 特別展示 .....          | 20 |
| E. 施設一般公開 .....        | 21 |
| F. サテライト展示 .....       | 22 |
| G. 特別企画 .....          | 24 |
| H. 巡回展示 .....          | 26 |
| I. その他 .....           | 26 |
| 2. 開 示—情報発信—           |    |
| A. インターネットミュージアム ..... | 27 |
| B. 所蔵標本データベース .....    | 27 |
| C. 出版・広報 .....         | 27 |

|                                     |    |
|-------------------------------------|----|
| 3. 教 育                              |    |
| A. 大学教育                             | 28 |
| B. 教育支援                             | 29 |
| 4. 研 究                              | 29 |
| 5. 社会貢献                             |    |
| A. 公開講演会                            | 31 |
| B. コミュニケーションミュージアム事業（九大糸島会・総合研究博物館） | 31 |
| 6. 連 携                              | 33 |
| IV. 専任教員の研究活動                       |    |
| 松隈 明彦                               | 35 |
| 岩永 省三                               | 36 |
| 中牟田義博                               | 38 |
| 宮崎 克則                               | 39 |
| 中西 哲也                               | 39 |
| 三島美佐子                               | 40 |
| 丸山 宗利                               | 43 |
| V. 施 設                              | 47 |
| VI. 規 則                             |    |
| 九州大学総合研究博物館規則                       | 49 |
| 九州大学総合研究博物館の教員組織に関する内規              | 51 |
| 総合研究博物館資料部内規                        | 51 |
| 九州大学総合研究博物館フィールド・ミュージアム部内規          | 53 |

## I. 博物館の2009～2010年度の活動－総括と分析－

博物館が大学に提出した中期目標・中期計画に則って、項目ごとに2009～2010年度の活動実施状況を概観し総括しておく。必要に応じて、2008年度以前の状況にも触れることとする。

○は中期計画として掲げた事項、◎はそれぞれの事項について、この2年間の実際の活動状況、およびその分析結果である。

### 大学の教育研究等の質の向上に関する目標を達成するために取るべき措置

#### 1 教育に関する目標を達成するための措置

##### (1) 教育の成果に関する目標を達成するための措置

###### 1) 学士課程

- 博物館専任教員は、各自の専門に沿った学部の兼任教員として、本務に差し支えない範囲で、講義、実習に積極的に関与する。
- ◎ 博物館専任教員は、各自の専門分野に関する理学部・農学部・文学部の兼任教員として、講義・実習を担当した(詳細は p 31)。これは博物館教員が各自の専門分野での研究成果を学部学生の教育に反映させて、教育現場との関わりを維持していく上で重要な業務である。各学部で学生の教育にかかわる中で、現在の学生の知的状況を把握し、大学博物館の教育への活用法を考察する良い機会となっている。

学芸員の養成については、全専任教員が理学部を開講部局とする学芸員資格関連科目の講義・実習を担当するとともに、文系教員は文学部開講の学芸員資格関連科目の講義・実習の一部も担当した。これは将来学芸員となる人材の養成に留まらず、博物館一般あるいは学術標本・文化財に対する理解・愛着を有す人材を少しでも多く社会に送り出す上で不可欠な業務であり、学生の関心を深めることに寄与している。

これら業務を今後も継続するとともに、日常的な博物館活動の成果を反映させつつ学生の興味関心を引き出す工夫を重ねる必要がある。

###### 2) 大学院課程

- 博物館専任教員は、専門に沿った学府の兼任教員、或いは協力講座担当教員として、本務に差し支えない範囲で、大学院教育に積極的に関与する。
- ◎ 理学府、比較社会文化学府、統合新領域学府等で講義・演習および学生指導を担当している(詳細は p 31)。博物館教員は博物館職員としての業務以外に各自の専門分野の研究を遂行しており、その成果を大学院生の教育に反映させる場を持つことは研究の深化上でも有効に作用している。それぞれの学府における大学院生教育に不可欠の役割を担うに至っており、今後も継続する必要がある。
- 標本資料を分析するための適切な方法論を持ち、実験・分析などの手段を通して、情報を適格に抽出できるよう教育する。
- ◎ 兼任教員として、理学府・工学府・農学府・比較社会文化学府の講義・演習を担当しており、そ

の修正・改良に努めてきた。博物館の実験・分析を行うための施設・設備の整備が進むにつれて、それらを用いたきめ細かな教育が可能になってきている。07年度に旧工学部本館に移転したのを機に、08年度から標本資料の収蔵展示室を設け、実物を用いた教育環境を整備する作業に着手し、現在継続中である。

- **理論・学史・先行研究を総括して研究動向と問題を適切に抽出し、その中に自分の研究を適切に位置付け、オリジナルな見解を提示し、その集積を体系化できるよう教育する。**
- ◎ 理学府・比較社会文化学府の博士課程（前期）の学生の指導を行っており、その修正・改良に努めてきた。大学院教育に必要な書籍類を順次揃えつつあり、07年度から旧工学部本館に図書室を設け利用しやすくした。

## (2) 教育内容に関する目標を達成するための措置

### 1) 教育方法に関する具体的方策

- **博物館施設、設備の開放、標本資料の貸出、展示の公開等により博物館資料を使った教育を支援する。**
- ◎ 大型プリンターの開放、イベントパネルの貸し出しによる教育の支援を継続的に行っている。大型プリンターは教員・学生から学会発表資料等の作成での使用希望が年々増加しており、極力要望にこたえるようにしている。

博物館所蔵標本資料の利用希望に対処するため、標本資料閲覧要綱（18年度制定）・標本資料貸与要綱（19年度制定）を定め、骨格標本については両要綱に則って閲覧や貸与を開始した。閲覧・貸与・写真掲載などの希望は年々増えつつあり、骨格標本以外の館蔵資料の増加につれてますます増えると予想される。それらに対応する体制の整備が今後の課題である。

展示の公開は博物館として不可欠な業務であり、開設以来、50周年記念講堂2階の常設展示室を公開してきたが、展示公開施設が乏しい状況から脱することができずにきた。06年度以降ようやく展示を増やせるようになってきた。

06年度に旧工学部知能機械工場建物（2008年1月に第一分館と改称）の2階に開設した骨格標本室を07年度・08年度には開学記念行事・公開講演会等に合わせて公開するとともに、外部からの依頼に応じて適宜公開した。07年度には同建物の1階に自然史資料室（高壮吉鉱物標本など）を移し博物館への移管はまだであるが公開を開始した。08年度には同建物1階に六本松地区図書館から旧玉泉館考古学資料を移し、公開へ向けての準備を開始した。10年度からは、これまで使用していなかった機械実習工場および鋳造実習工場部分の一般公開および催事利用に取り組み始めた。同建物は今後ますます教育のための使用頻度が高まると予想されるが、この建物が通常無人であり、保安上の難点があることから、常時公開できないことが問題である。

07年度に利用が認められた旧工学部本館3階に、19年度末から20年度にかけて常設展示室・収蔵展示室を整備し、08年度から公開を開始し、芸術工学研究院による演習の場として提供したほか、NPOによる「科学の公園」事業に協力して展示室を公開した。このように06年度以降着実に施設・設備・展示の公開を進めており、今後さらに質の向上をはかっていく必要がある。

- **論文発表会の開催を支援する。**
- ◎ 博物館の展示場と展示用具を他部局の論文発表会に貸し出し、有効に活用して頂く事での教育支援を目指している。02から04年度まで農学部農学分野の公開卒業論文発表会の開催を支援したが、

05年度以降、博物館運営委員会を通じて全学へ向けて卒業研究発表会の募集を行なったが応募がない状況が続いている。今後も継続するかどうか再検討の必要がある。

○ **博物館の施設、設備を充実させる。**

◎ 伊都キャンパスへの移転まで新しい博物館建物の建設が望めない状況が続くことは、当博物館にとって深刻な問題である。当面は、箱崎キャンパスにおいて暫定的な施設を少しでも多く獲得し、展開可能な博物館活動を拡大する努力を続ける必要がある。

施設については、創設以来5年間、旧工学部図書館建物の教員室、50周年記念講堂の展示室・標本整理室以外に施設が増やせない状況が続いていた。特に標本収蔵施設を持たないことは、学内各部署等の標本の移管、学内外からの標本の寄贈を困難にし、博物館にとって致命的な弱点となっていた。ようやく05年度に工学部の移転に伴って、約2000㎡の旧知能機械工場建物を博物館施設として獲得し、その2階に骨格標本室、同建物1階に工学機械収蔵室を設けたのに続いて、07年度に同建物1階に自然史資料室を設けた。08年度には同建物1階に玉泉館資料展示室および、故岡崎敬先生旧蔵資料・書籍類収蔵室を整備した。

07年度に旧工学部本館建物において合計約925㎡の部屋の使用が認められ、08年度にかけて教員室・会議室・展示準備室・実験室・書庫・標本整理室を整備し、08年度には階段教室を改造して常設展示室を開設した。また同建物4階会議室を当館管理下に移して展示室とした。

また07年度に旧工学部4号館建物に730㎡の部屋の使用が認められカルテ資料収蔵室とした。このように状況改善の努力は少しずつ成果を出しつつある。今後もこれらの施設を十分に機能させるよう努めるとともに、施設獲得の努力を続ける必要がある。

設備については、博物館が研究・研究支援・教育・教育支援を行う上で不可欠である。20年度には生物系標本整理室に殺虫用の超低温冷凍庫を設置したが、今後も機器類の整備を続け、学生・大学院生の研究・教育への活用という本来の目的に沿った活用を図る必要がある。

### (3) 学生への支援に関する目標を達成するための措置

#### 1) 学生への学習支援に関する具体的方策

○ **博物館資料の情報を提供し、学生の勉学を支援する。**

◎ すでに博物館に移管された資料のみならず、九大全学の学術標本の情報化を推進して提供し、学生の勉学に役立てることは大学博物館の重要な使命である。07・08年度にも標本資料データベースの充実を推進し、博物館ホームページ、研究報告、博物館ニュースを通じ情報を提供した。

実物資料の教育への活用として、07年度には自然史資料室の高壮吉鉱物標本、08年度には常設展示室の展示物を、学部生・大学院生の教育用として活用し始めた。このほか08年度には、六本松地区図書館から旧玉泉館考古資料を第一分館1階に移して公開の準備を始めたほか、旧工学部本館建物については、昆虫整理室に、寄贈を受けた佐々治標本・大塚標本・村井標本、および六本松地区から移動した鳶標本を収蔵した。化石標本室には六本松地区から移動した小池標本を収蔵した。植物標本室には学内に散在している標本棚の一部を移設し、最近の証拠標本および東京大学から寄贈された標本を収蔵した。液浸標本室には液浸魚類標本を収蔵した。これらも順次、学生の教育に供する予定である。今後、データベースについては公開件数をさらに増加させ、実物資料については公開場所の獲得と展示・活用方法の研究・改善に努める必要がある。

九大全体の所蔵資料の量に比べると、提供が可能になった情報量はまだ多くはないが、継続的に

実施し、提供量の増大を図る必要がある。これらを博物館職員が教育に活用するだけでなく、学内の各部局に積極的に情宣し、学際的活用を促していく必要がある。

このほか08年度に、国内外の昆虫学・植物学・考古学関係図書等の寄贈を受け、また研究費より博物館学関係の図書を購入して図書室に配架し、学生の勉学に供した。特に、09年度、10年度は、統合新領域学府や芸術工学府の学生によるミュージアム関連の教育および調査研究の場として利活用がなされてきている。

- **博物館建物の建設に際しては、学部学生、大学院生のために研究の便宜を図るスペースを確保するよう考慮して設計に当たる。**
- ◎ 伊都キャンパスへの移転まで新しい博物館建物の建設が望めない状況が続くために、当面は、箱崎キャンパスの博物館施設に学部学生・大学院生の勉学のためのスペース確保を続けている。08年度には旧工学部本館3階に、学生教育用の研究室・ゼミ室を設け、顕微鏡などの教育機器を設置し学習図書を配架した。第一分館2階の研究室および50周年記念講堂3・4階の一部を学生の研究・教育用に整備した。生物系標本整理室には、作業台・椅子を配し、研究・教育・ワークショップなどに活用できるように整備した。これらを教育に有効利用するとともに今後もスペースの充実を図る必要がある。

## 2 研究に関する目標を達成するための措置

### (1) 研究水準及び研究の成果等に関する目標を達成するための措置

#### 1) 目指すべき研究の方向性

- **他大学との研究情報交換システムを確立する。**
- ◎ 大学博物館は、各教員の個人的研究テーマとは別に、大学博物館固有の課題と研究分野を持つ。それらの多くは他の大学博物館と共通しており、各館が別個に取り組むだけでなく、実践例やその結果などについて大学博物館相互で情報交換を行なうことによって、研究を活性化していくことが有効的である。また情報交換は単発的でなく、システムを確立して持続的に深化していく必要がある。
- そのため、04年度以降毎年、国立大学博物館等協議会（18年度以降、大学博物館等協議会と改称）・同館長会議・全国博物館長会議に出席し意見交換・情報収集を行い、情報交換会議の必要性について議論してきた。このような大学博物館どうしの問題意識の共有を背景として06年度に博物科学学会が設立され、年に一回の大学博物館等協議会大会と同日に学会形式で課題への取り組みを研究発表する場ができた。07年度には九州大学で大学博物館等協議会2007年大会・第2回博物科学学会を開催し、08年度には、大学博物館等協議会2008年大会・第3回博物科学学会に参加し、様々な問題について議論を深め他大学との情報交換会に努めるとともに、館長会議・実務者会議・協議会総会において情報交換会議の必要性について議論した。当面は博物科学学会に積極的に参加することによって、同学会を研究情報交換システムとして熟成させていくことが望ましく、当館が主導的役割を果たせるように努力する必要がある。
- **博物館に複数の学問分野の教員が共存する利点を生かし、異なった分野間で情報交換、及び共同研究を行い、標本資料に基づく新たな境界領域・研究分野を開拓する。**
- ◎ 当博物館の利点を活かした学際的共同研究は、博物館の設立当初から必要性を認識しており、

徐々に共同研究の幅を広げつつある。08年度には、博物館教員・資料部教員が互いの専門分野への理解を深めるために月1回の頻度で「博物館談話会」を実施し研究発表を行った。また、博物館展示室の展示資料の活用方法の研究を博物館職員共同で行い、子供向け活用補助ツール開発とその評価を行った。このほか、07・08年度には軟体動物学、植物学を専攻する博物館教員が、共同研究の計画を立て、科学研究費補助金（基盤C）に応募し、10年度の採択課題として、12年度までの3カ年の共同研究を実施している。また、10年度には、骨格標本の3Dデジタルアーカイブに関する科学研究費補助金（基盤C）の芸術工学研究院教員との共同研究が採択され、同様に3カ年の共同研究を実施している。今後さらに文科系・自然史系を横断した学際的共同研究を目指して、積極的な働きかけを行なう必要がある。

○ **博物館を核として、標本資料に基づく全学的規模の学際的共同研究を行う。**

◎ 06年度に三島助教を中心とする、人間環境学研究院教授・芸術工学研究院教授・USI学術研究員との共同研究「九州大学博物館展示を利用した実践的研究—アウトリーチ活動のあり方と大人と子どもの間の関わりを促すツール開発—」がP&Pに採択され、07年度から開始した。07年度には6回のセミナーを実施し、学外から講師を招聘してさまざまな博物館教育の実践事例を学習するとともに、夏の公開展示を利用した学術調査を行った。08年度には、学内外から講師を招聘した7回のセミナーと4回のワークショップを実施し、さまざまな事例を学習するとともに、展示室における現地調査とアンケート調査による学術調査を行った。この研究で形成された人的ネットワークを基礎に「Renovative Museology 創成リサーチコア」を組織し、10年度に承認された。

2) 成果の社会への還元等に関する具体的方策

○ **研究紀要、資料集を発行し、博物館の研究活動を社会へ還元する。**

◎ 02年度から「九州大学総合研究博物館研究報告」を毎年1号ずつ定期的に発行し、博物館の研究活動を社会に還元するとともに、九州大学が収蔵する標本資料の情報を発信している。09年度に第8号、10年度に第9号を発行し、研究機関・研究者・他博物館等に配布した。

博物館教員それぞれの専門分野の研究成果については各分野の学術誌に発表できるが、多様な博物館活動に関わる研究成果の発表が可能な場として「研究報告」は重要かつ不可欠な役割を果たすに至っている。今後も継続的な刊行を目指して努力する。

○ **博物館が所蔵する標本資料のデータベースを作成し、インターネットを通じて社会へ公開する。**

◎ 16年度以降、博物館ホームページを通じて、標本資料のデータベースを公開しており、07・08年度には資料部を構成する様々な分野にデータベース化推進経費を配分して標本資料の整理を促進し、その成果として標本資料データベースをさらに充実させた。10年度にはデザインをリニューアルし、学外からのアクセスも多く、学界に多大の寄与を果たすに至っているのに加え、来るべき新キャンパスへの移転時に他部局から当館への標本類の移管・移動が本格化することから、さらに速度を速めて標本資料の整理とデータベース化を進める必要がある。現状では、分野によって整理およびデータベース作成の進捗状況に遅速が出ていることから、博物館教員が的確に仲介して事業を推進する必要がある。

○ **年報、ホームページ、博物館ニュース、紀要等を通じて博物館活動の状況を社会に公開する。**

◎ ホームページ（逐次更新）、博物館ニュース（年2回）、研究報告（年1回）、年報（2年に1回）、の充実を通じて博物館活動を社会へ公開している。研究報告はweb版をホームページに掲載し研究者に便宜を図っている。刊行物は、市内小中高等学校など教育機関、行政、国内の大学博物館等関

係機関、講演会参加者等に配布した。

10年度にはホームページのリニューアルを図った。07年度に博物館ニュース第9号・第10号、研究報告第6号を刊行し、博物館概要・博物館概要英語版を更新した。08年度には博物館ニュース第11号・第12号、研究報告第7号を刊行するとともに、公開展示「奴国の南」に際して図録を製作し来場者・研究機関等に配布した。

ホームページでは、博物館の概要や行事予定とともに、過去の展示会の説明パネルやデータベースを公開し、年々充実度を高めてきた。博物館ニュースでは学術的内容を一般向けに分かりやすく解説する読み物を中心とし、研究報告は博物館教員の研究成果を主とする。年報では博物館の多様な活動を網羅的に概観している。これらの出版や更新は現在の所軌道に乗っており、内容の更なる充実をめぐる必要がある。

## (2) 研究実施体制等の整備に関する目標を達成するための措置

### 1) 研究者等の配置に関する具体的方策

#### ○ 資料部及びフィールドミュージアム部の協力教員制度の充実を図る。

◎ 九大が所蔵する学術標本は750万点を越え、博物館の専任教員7名だけでは、管理・収蔵・保管・研究など対応は不可能であり、学内の各部門・分野の協力教員制度を充実する必要があることは言うまでもないことから、資料部及びフィールドミュージアム部の協力教員制度の充実を図ってきた。資料部については、工学機械類・医学部附属病院カルテ類など、博物館が扱う資料分野が増加するたびに、新規に協力教員の増加を図っている。また教員の定年などに際しては速やかに後任を決定するようにしている。(詳細はp16・17)

フィールドミュージアム部については、06年度にその必要性について教員会議で議論を始め、07年度に英彦山の施設を利用した昆虫の野外観察の計画を立案した。08年度にはフィールドミュージアム部の立ち上げに備え、学振の「ひらめきときめきサイエンス」事業を活用し英彦山の施設を利用した昆虫・植物・陸貝・岩石の野外観察会を実施した。今後、関係施設と連絡をとり、活動内容や協力研究員へのフィールドミュージアム部参画の呼びかけ、事故・災害への保証・対応を検討し、活動を具体化する必要がある。

#### ○ 学外の研究者、名誉教授等を対象とした協力研究員制度の充実を図る。

◎ 04年度以降毎年、協力研究員の充実を図っており、09・10年度も協力研究員の充実を図り、資料整理、資料に基づく研究に協力してもらっている。08年度にあらたに専門研究員制度を立ち上げ、数名を受け入れ、専任教員とともに研究を実施している。18年度まで協力研究員用の作業室は記念講堂4階の狭隘な部屋しかなかったが、07年度後半に旧工学部本館建物に分野別の標本整理室を獲得できたので、余裕を持った空間で作業してもらえるように08年度から設備面の整備を進めている。

### 2) 研究環境の整備に関する具体的方策

#### ○ 教員研究室・実験室を整備する。

◎ 創立以来狭隘な教員研究室・実験室しか持たなかった当館にとって、その整備は緊急を要する課題であった。04年度に部屋の要望(緊急的要望)、中期的建物の確保の要望を出し、05年度には工学部の移転が始まり残置していった技術史系資料を保存し、活用するために、博物館の過渡的施設整備について「要望」を作成し、標本室・展示室の獲得に努めた。05年度に医学部基礎研究A棟に所

在し比較社会文化研究院が管理していた古人骨・動物骨格標本が移転を迫られたために、比較社会文化研究院から当館へ移管手続きを行ない、旧工学部知能機械工場を収蔵施設として獲得したのを契機に、同建物2階に資料調査室を設け研究・調査用としたが、教員室から離れている難点があった。06年度に工学部移転後の空きスペースを確保するため要望書を提出し、07年度に旧工学部本館建物に教員室（計218㎡）、実験室（計150㎡）を獲得し、08年度にはその整備を進めた。09年度から本格的に稼働させつつ、研究・実験のための環境をさらに整えるとともに、将来の新キャンパスにおける博物館建物での研究環境の構想を練る必要がある。

○ **競争的資金の獲得を積極的に行う。**

◎ 04年度以降毎年、すべての専任教員が科学研究費補助金、その他の研究費補助金に応募している。また学内のP & Pは、09年度に機動的P & Pの枠において、三大学博物館連携事業として、学芸員カリキュラムの改変に向けた予備的実践研究に取り組んだ。そのほか、09年度には2つの民間研究助成、10年度には1つの民間研究助成に応募した。今後も地道に競争的資金獲得の努力を続ける必要がある。

○ **寄付の意識を高める運動を行う。**

◎ 06年度に大学博物館等協議会の機会を通じて、他博物館の博物館後援会について意見を聞いたが、07・08年度まで着手できていない。07・08年度には大学博物館等協議会等の機会を通じて、他博物館の博物館後援会について意見を聞いた。10年度からの催事のさいには、募金という形で寄付を呼びかけた。外部に寄付を仰ぐには、外部からの評価を受けるに足る、それなりの自前の施設の獲得と活動の蓄積が必要であり、今後の努力にかかっている。

○ **標本の同定・分析依頼に対しては内規を定め、料金の徴収を検討する。**

◎ 06年度に同定・分析依頼について料金を取ることにについて教員会議で議論したが、当面は徴収してない。今後の検討課題であるが、各種の分析を独自にこなすための設備・機器の充実を先行して図る必要がある。

○ **新キャンパスの博物館の設計に際しては、常設展示ができた後は入館料を徴収すること、博物館内にミュージアムショップを設け、図録、写真、絵葉書、図鑑など知的生産物の販売を行うことを検討する。**

◎ 新キャンパスにおける博物館建設が具体化しておらず、08年度まで着手できていない。過去の公開展示に際して製作した図録類はいずれも無料で配布しているが好評であり、06年度に絵葉書の試作品を製作した。08年度には将来の図録・写真集・絵葉書等の作成・販売を見据え、経験を蓄積するため、公開展示「奴国の南」展に際して、プロの写真家による写真撮影、水準の高い図録の作成を試みた。将来の販売に備えて、こうしたより良い知的生産物製作の経験・ノウハウを蓄積し続けることが重要である。

○ **光熱水費の節約を図る。**

◎ 会議・講義等で部屋を離れる際は、こまめに消灯等に努めるようにしている。08年度には旧工学部本館の常設展示室・収蔵展示室の高熱水費の節約のため、窓に断熱フィルムを貼った。旧工学部本館・旧工学部4号館・第一分館など、当館が使用する建物・部屋が増加すれば不可避免的に光熱水費が増加する。特に標本収蔵室は温湿度管理が重要であり、窓に断熱フィルムを貼るなどの対処療法では限界があり、将来的には空調設備を備えざるをえない。標本類は大学全体の財産でもあり、全学的な理解を得て新たに予算要求するなど方策を立てる必要がある。

- **新キャンパスでの博物館建物の建設に際しては、省エネ型建物を目指す。**
- ◎ 新キャンパスにおける博物館建設が具体化しておらず08年度まで着手できていないが、将来の建設に備えてより良い建物について研究しておく必要がある。
- **新キャンパスでは、人の空間と標本の空間を可能な限り分離して、防虫等のための薬品の影響が人に及ばないように努める。新キャンパス移転後は、模式標本など貴重標本の収蔵・管理のため、標本庫の滅菌、殺虫消毒を定期的に行うが、薬剤による燻蒸を避け、冷凍による滅菌、殺虫を行い、博物館の職員、学生の安全を図る。**
- ◎ 新キャンパスにおける博物館建設が具体化しておらず08年度まで着手できていないが、将来の建設に備えてより良い方法について研究しておく必要がある。

### 3) 教育研究組織の見直しの方向性

- **一次資料研究系、分析技術開発系、開示研究系の業務内容の見直しや、系間の境界線の撤去を検討する。また、教員相互の連携を図り、縦割りシステムを改善する。**
- ◎ 現在の3系体制は、1990年代後半から大学博物館の設立が始まった際に、主要大学横並びで設置された経緯があり、より適当な体制を検討する必要は、常々議論してきた。04年度から研究と教育のほか地域連携・社会貢献を重要な柱の一つとする改組の検討を始め、06年度には各系の内容や系間の境界について教員会議で議論を始めた。これを受け、07年度には館の基本的使命（ミッション）の再検討を始め、08年度には改組に備えた将来計画会議を立ち上げ、ミッションを確認し、移転までの具体的活動計画を策定し、各系の内容や系間の境界についての議論を始めた。09年度以降、しばしば改組についての議論を実施するが、実現には至っておらず、理学部の本格移転に向け、より具体的な検討を必要とする。

### 4) 研究の質の向上に関する具体的方策

- **博物館の設計に当たり、博物館資料のデータベース化を進め、内外の研究者へ向けた情報の発信を行うスペース、国内外の研究者との研究交流を発展させるスペースを設けるよう検討する。**
- ◎ 新キャンパスにおける博物館建設が具体化しておらず08年度まで着手できておらず、今後の検討課題であるが、将来の建物建設に備えてより良い設計について研究しておく必要がある。08年度には西日本自然史系博物館ネットワークによるデータベース研究会の実施をサポートし、他大学や他博物館の現状や問題点を認識することに努めた。
- **事業計画、予算・決算、博物館活動報告等を載せた年報を作成し、学内、周辺の大学、高校、周辺市町村、県、国、関連機関等へ配布して、博物館活動への理解と協力を求める。**
- ◎ 07年度に「九州大学総合研究博物館年報第2号2005-2006年度」を、09年度に「九州大学総合研究博物館年報第3号2007・2008年度」を刊行した。本書は第4号となる。今後も定期的な刊行と内容の充実を図る必要がある。
- **入館者に対するアンケート調査を行い、博物館に対する要望、評価をこまめに受けると共に、定期的に外部評価を実施する。**
- ◎ 07・08年度に公開展示、公開講演会などに際してアンケートを実施し、参加者の要望の把握に努め、結果を分析し活動の改善に有効に反映させるよう努力した。また、P & P 研究を通してこれまで登録されていた一般の方々を対象にアンケート調査を実施し、要望等を分析した。外部評価については、05年度に8名の外部評価委員による外部評価ののち、09年度に10名の外部評価委員による外部評価を実施した。外部評価委員からの意見は、当館の業務が多岐に広がり過ぎ、力を注ぐべき

方面が手薄にならざるを得ない現状を指摘し、ミッションの再検討・絞込みを促すもので、今後の業務の見直しに非常に示唆的であった。今後も4～5年に一度外部評価を受け、大学博物館の使命など基本的な問題について議論し、現状の改善、将来の進路の検討に活用していくことが必要である。

#### 5) 施設設備の整備などに関する目標を達成するための措置

- **新キャンパスにおける博物館については、楽しみながら学ぶ、ゆとりある魅力的な設備を整備する。**
- ◎ 新キャンパスにおける博物館建設が具体化しておらず08年度までは着手できていない。10年度から制作に着手した「プロモーションDVD」では、将来イメージを盛り込むこととしている。今後の検討課題であるが、将来の建設に備えてより良い設備について研究しておく必要がある。
- **博物館の研究と教育研究支援業務を円滑に行うための分析機器の導入を図る。**
- ◎ 16年度まで分析機器の導入のため概算要求の申請を行なったが、05年度以降は標本庫・展示室の緊急の整備を図るため営繕工事の要求を行い、機器の導入のための概算要求は行なわなかった。高額な分析機器の導入は運営経費の枠内では困難であり、05・06年度には他部局からの中古品の移管で何とかしのいだり、大学院生の研究・教育に利用できるようにはなった。今後も機器類の整備を続ける必要があるが、予算獲得の困難が問題点である。
- **保存環境に配慮した安全な標本庫と安定した標本の整理・管理システムを作り、民間等のタイプ標本を含む重要標本の寄贈、寄託に寄与する。**
- ◎ 当館は創設以来長らく自前の標本収蔵施設を持たず、安全な標本庫導入の余地がなかったために重要標本の寄贈・寄託に対応できなかった。重要標本が他館に収蔵された事例もある。05年度までは少量の標本のみを受け入れ、暫定的に50周年記念講堂の展示室の一角に保管してきた。06年度に開設した骨格標本室も空調設備を備えるに至っていない。07年度に旧工学部本館建物に分野別の収蔵展示室を獲得できたので、08年度には各整理室はUVカットフィルムを窓ガラスに貼り付け、空調を整備することによって紫外線に湿気による標本の劣化を防ぐ努力をした。09年度以降に保存環境をさらに整えるとともに、標本の整理・管理システムの構築に着手し、今後増加すると予想される標本の寄贈・寄託に備える必要がある。
- **科学研究費補助金等を利用して、東南アジアを始めとする国内外の学術調査を行い、標本の充実を図る。**
- ◎ 07年度は中島平和財団のアジア地域重点研究助成で採択された中国の研究者との共同研究により、中国内陸部での植物の学術調査を行うと同時に、現地の自生植物の標本を収集した。08年度には中国海洋大学から南海北部湾産のタマキガイ類標本の提供を受け、日本産類似種と遺伝学的な比較を行った。09年度からは、科学研究費補助金基盤研究B海外学術研究において、インドを中心とした学術調査に取り組んだ。こうした地道な調査・収集を今後も継続する必要がある。

### 3 その他の目標を達成するための措置

#### (1) 社会との連携、国際交流等に関する目標を達成するための措置

##### 1) 教育研究における社会との連携・協力の推進方策

- 学内展示及び国公立博物館との共催の公開展示、サテライト展示を通じて、大学の研究、教育

### を社会に紹介する。

- ◎ 各種の展示は、当館がもっとも時間と労力を費やし努力している事業である。

公開展示では、09年度は「昆虫のヒミツ」展を、10年度には「人のからだ・動物のからだ」展を、福岡市立少年科学文化会館で開催した。公開展示は学内各部局の研究・教育の成果を展示・情報発信するものであり、借用する会場の主要来館者層に合わせて展示の手法や説明の難易度を調整し、アンケートで感想や意見を回収するなど、将来の新キャンパスでの開館に備えて様々な試みを行ってきた。来館者の反応は概ね良好であるが、大学博物館としてさらに挑戦的な展示や改良に取り組む努力が今後も必要である。

学内展示では、09年度は「九州大学教育・研究の最前線—第8回P & P研究成果一般公開—」、10年度に「九州大学教育・研究の最前線—第9回P & P研究成果一般公開—」を開催した。P & P展は説明パネル主体で、内容が専門的であるために入館者が少ないのが悩みであったが、10年度は特に見学者数が低迷し、今後展示方法を再考する必要がある。一方で、研究推進部との連携により、ウェブサイト上での相互リンクが成立し、アクセス数も増えつつあることから、P & P採択研究成果発表は継続する必要がある。このほか、09年度、10年度ともに「骨格標本室特別公開」、「九州大学所蔵自然史標本・資料の写真展」、「貴重地質・鉱物標本」「中山平次郎先生関係資料」の一般公開を実施した。

サテライト展示は、03年度以前からの継続分として福岡空港、前原市立伊都文化会館、05年度から福岡市保険環境研究所「まもる—む福岡」、二丈町健康ふれあい施設「二丈温泉きららの湯」、志摩町総合保健福祉センターで展示を定期的に更新した。ここ数年でサテライト展示が増加し、展示の準備や展示換えなどの労力が次第に過大になりつつあるため、09年度以降に現体制で続けるか検討することとしたが、ひきつづき継続している。九大・糸島会と共同で、新キャンパス周辺地域でコミュニケーションミュージアム事業を計画し、地域資源再発見塾、大学と地域の交流事業を行った。

- “インターネット博物館”を充実させ、公開展示、大学収蔵標本の概要を紹介する。

- ◎ 毎年、公開展示・学内展示などが終了するたびに展示パネルの内容を順次公開し、適宜情報を追加・充実させている。これは他の大学博物館では行っていない独自の取り組みであり、外部からのアクセスや出版社などからの転載依頼も多く好評を頂いている。今後も継続して情報を追加・充実させる必要がある。

- フィールドミュージアム部を中心にして、社会人及び学生を対象とした野外実習を実施する。

- ◎ 07年度に、農学研究院の兼任教員と、英彦山の施設を利用した昆虫の野外観察の計画を立案した。08年度にはフィールドミュージアム部の立ち上げに備え、学振の「ひらめきときめきサイエンス」事業を活用し英彦山の施設を利用した昆虫・植物・陸貝・岩石の野外観察会を実施したが、09-10年度は実施していない。今後、関係施設と連絡をとり、活動内容や協力研究員へのフィールドミュージアム部参画の呼びかけ、事故・災害への保証・対応を検討し、活動を本格化する必要がある。

- 博物館専任教員及び外部の研究者を講師とした普及講演会を開催し、生涯学習に寄与する。

- ◎ 09年度は第9回公開講演会「月と宇宙」(2010年3月14日)、10年度には第10回公開講演会「どうする、どうなる!? 九大の標本資産」を実施した。館者の反応は概ね良好であり、今後もニーズを的確に把握しつつ、興味深いテーマを開拓していく必要がある。

- 国内の博物館職員、学芸員等の研修（リカレント教育）及び研究の訓練を行う。
- ◎ 06年度には大学博物館においてリカレント教育を行う場合の問題点を教員会議の議題として検討を始めたが、10年度まで着手できていない。11年度以降も課題となっている。
- 青少年の理科離れの是正や総合学習を積極的に支援するため、県・市町村教育委員会との間で、小中高校教員が博物館で初等・中等教育に当たる制度を検討する。
- ◎ 大学博物館が、初等中等教育にどの程度、どのように関与していくのか議論が必要な問題であるが、今の所、県・市町村教育委員会との間での制度の検討には着手できておらず、学内的な検討に留まる。06年度に、USI 子供プロジェクトの教員との懇談会を開き初頭・中等教育と大学博物館の関わりに関する意見を聞いたり、小学校の総合学習担当教諭から総合学習支援に対する要望等を聞いた。07年度に、P & P 研究「九州大学博物館を展示を利用した実践的研究—アウトリーチ活動のあり方と大人と子どもの間の関わりを促すツール開発—」の課程で、初等・中等教育と大学博物館の関わりを研究するためのセミナー実施したほか、個別の聞き取りも行い、当該問題に詳しい専門家から意見を聞き議論を行なった。09年度、10年度は、福岡市の「職場体験」の体験先として、それぞれ1名の中学生を受け入れるとともに、10年度は、小学生の見学も受け入れた。このような見学や少年科学文化会館における展示等をとおし、主体的に初等・中等教育に関わることとなっており、将来本学を志望する学生を醸成することにもつながっている。
- 博物館活動を支援する館外組織としてボランティア制度を取り入れる。九州大学総合研究博物館の社会教育事業を通じて、博物館の円滑な運営を助ける教育ボランティアと標本の収集、整理、データベース化と研究を補助する研究ボランティアの育成を図る。
- ◎ 04年度にボランティア制度を導入済みの他博物館の現状を調査することを計画し、05年度に前原市伊都博物館のボランティア制度の調査を開始した。06年度に九州大学の現状に合ったボランティア制度の研究に着手したが、07年度まで導入できていない。08年度以降、個人的なボランティアはあるものの、組織化はされていない。

## 2) 教育研究活動に関連した国際交流に関する具体的方策

- 国外の博物館職員、学芸員等の研修（リカレント教育）及び研究の訓練を行う。
- ◎ 組織的な動きとはなっていないが、09年度にはインドの研究者の受け入れを行った。今後もこのような地道な国際交流の努力を続ける必要がある。
- 関連部局の教員と共同で、東南アジアを中心に海外の研究者をパートナーとした共同研究を実施する。
- ◎ 植物関係では、09年度から科学研究費補助金で採択されたインドの研究者との共同研究により、インド国内での野外調査（2回）を行い、また先方の研究者による国内での野外調査（2回）を実施した。軟体動物関係では、07・08年度に韓国の研究者と日本の陸生貝類の起源と移動に関する共同研究を計画し、昆虫関係では07年度に中国・イラン・オーストリア・オランダ・アメリカ・カナダの研究者との共同研究を実施し、08年度にはマレーシアで野外調査を行い、中国・イラン・オーストリア・オランダ・イギリス・アメリカ・カナダ・オーストラリア・マレーシア・タイの研究者との共同研究を実施した。

## II. 組 織

九州大学総合研究博物館の組織は、館長のもと研究部、事務部、資料部、フィールドミュージアム部から構成されている。さらに、運営の諮問機関として運営委員会がある。

### 館 長

2009年4月 - 2010年3月 松隈明彦（総合研究博物館）

### 運営委員会委員

| 所 属           | 2009年度    | 2010年度          |           |
|---------------|-----------|-----------------|-----------|
| 総合研究博物館長      | 教 授 松隈 明彦 |                 |           |
| 同 副館長         | 教 授 岩永 省三 |                 |           |
| 副学長           | 理 事 水田 祥代 | 副学長 川本 芳昭       |           |
| 総合研究博物館       | 准教授 中牟田義博 |                 |           |
|               | 准教授 中西 哲也 |                 |           |
|               | 准教授 宮崎 克則 |                 |           |
| 附属図書館長        | 理 事 丸野 俊一 | 副学長 川本 芳昭       |           |
| 情報基盤研究開発センター長 | 教 授 青柳 陸  |                 |           |
| 人文科学研究院       | 教 授 佐伯 弘次 | 教 授 坂上 康俊       | 教 授 佐伯 弘次 |
| 比較社会文化研究院     | 准教授 溝口 孝司 |                 |           |
| 人間環境学研究院      | 教 授 堀 賀貴  |                 |           |
| 法学研究院         | 教 授 熊野 直樹 |                 |           |
| 経済学研究院        | 准教授 堀井 伸浩 | 准教授 遠藤 雄二       |           |
| 言語文化研究院       | 准教授 中里見 敬 | 准教授 カスヤン・アンドレアス |           |
| 理学研究院         | 教 授 佐野 弘好 |                 |           |
| 数理学研究院        | 教 授 隠居 良行 | 准教授 水町 徹        |           |
| 医学研究院         | 教 授 目野 主税 |                 |           |
| 歯学研究院         | 准教授 名方 俊介 | 准教授 白土 雄司       |           |
| 薬学研究院         | 准教授 田中 宏幸 |                 |           |
| 工学研究院         | 教 授 江原 幸雄 | 准教授 外井 哲志       |           |
| 芸術工学研究院       | 准教授 古賀 徹  |                 |           |
| システム情報科学研究院   | 准教授 高橋 規一 | 准教授 岡田 義広       |           |
| 総合理工学研究院      | 准教授 堤井 君元 |                 |           |
| 農学研究院         | 教 授 川口 栄男 |                 |           |
| 生体防御医学研究所     | 教 授 藤 博幸  | 教 授 佐々木裕之       |           |
| 応用力学研究所       | 准教授 市川 香  | 准教授 寒川 義裕       |           |
| 先導物質化学研究所     | 教 授 三島 正章 | 教 授 稲永 純二       |           |
| 理学部等          | 事務長 根本 正明 |                 |           |

**研究部** (2009 - 2010年度)

一次資料研究系：教 授 岩永 省三 准教授 中牟田義博  
 分析技術開発系：教 授 松隈 明彦 准教授 中西 哲也  
 開示研究系：准教授 宮崎 克則 (2010年3月～転出)  
 助 教 (2010年12月～准教授) 三島美佐子 助 教 丸山 宗利

**事務部** (2009 - 2010年度)

専 門 職 員：木下 隆司 (～2009年3月)、笠 敏治 (～2010年7月)、岡田 昌弘 (2010年8月～)  
 事 務 補 佐 員：正木真紀子 (～2010年9月)、梅野 美樹 (2010年10月～)  
 研究支援推進員：福原美恵子

**資料部** (2010年度)

|        |       |            |
|--------|-------|------------|
| 自然史    |       |            |
| 動物・医動物 | 金子たかね | 農学研究院      |
|        | 飯田 弘  | 農学研究院      |
| 植物     | 矢原 徹一 | 理学研究院      |
|        | 安井 秀  | 農学研究院      |
|        | 川口 栄男 | 農学研究院      |
|        | 三島美佐子 | 博物館        |
|        | 生薬    | 田中 宏幸      |
| 昆虫     | 多田内 修 | 農学研究院      |
|        | 荒谷 邦雄 | 比較社会文化研究院  |
|        | 高須 啓志 | 農学研究院      |
|        | 阿部 芳久 | 比較社会文化研究院  |
|        | 高木 正見 | 農学研究院      |
|        | 上野 高敏 | 農学研究院      |
|        | 紙谷 聡志 | 農学研究院      |
|        | 津田みどり | 農学研究院      |
|        | 緒方 一夫 | 熱帯農学研究センター |
|        | 館 卓司  | 比較社会文化研究院  |
|        | 丸山 宗利 | 博物館        |
| 水生生物   | 川口 栄男 | 農学研究院      |
|        | 望岡 典隆 | 農学研究院      |
|        | 野島 哲  | 理学研究院      |
| 地史・古生物 | 清川 昌一 | 理学研究院      |
|        | 高橋 孝三 | 理学研究院      |
|        | 佐野 弘好 | 理学研究院      |
|        | 鹿島 薫  | 理学研究院      |
|        | 下山 正一 | 理学研究院      |
|        | 坂井 卓  | 理学研究院      |
| 有機化石   | 山内 敬明 | 理学研究院      |
|        | 北島富美雄 | 理学研究院      |

|          |       |              |
|----------|-------|--------------|
| 岩石       | 小山内康人 | 比較社会文化研究院    |
|          | 中野 伸彦 | 比較社会文化研究院    |
|          | 寅丸 敦志 | 理学研究院        |
|          | 池田 剛  | 理学研究院        |
|          | 宮本 知治 | 理学研究院        |
|          | 石田 清隆 | 比較社会文化研究院    |
|          | 中牟田義博 | 博物館          |
| 鉱物       | 加藤 工  | 理学研究院        |
|          | 久保 友明 | 理学研究院        |
|          | 桑原 義博 | 比較社会文化研究院    |
|          | 石橋純一郎 | 理学研究院        |
|          | 上原誠一郎 | 理学研究院        |
| 地球電磁気    | 湯元 清文 | 理学研究院        |
| 人類先史     | 田中 良之 | 比較社会文化研究院    |
|          | 中橋 孝博 | 比較社会文化研究院    |
| 文化史      |       |              |
| 考古       | 辻田淳一郎 | 人文科学研究院      |
|          | 宮本 一夫 | 人文科学研究院      |
|          | 岩永 省三 | 博物館          |
|          | 溝口 孝司 | 比較社会文化研究院    |
| 記録資料     | 佐伯 弘次 | 人文科学研究院      |
|          | 服部 英雄 | 比較社会文化研究院    |
|          | 吉田 昌彦 | 比較社会文化研究院    |
|          | 中野 等  | 比較社会文化研究院    |
|          | 高野 信治 | 比較社会文化研究院    |
|          | 植田 信廣 | 法学研究院        |
|          | 熊野 直樹 | 法学研究院        |
| 宮崎 克則    | 博物館   |              |
| 美術資料     | 後小路雅弘 | 人文科学研究院      |
| 医学資料     | 前原 喜彦 | 医学研究院 (病院兼任) |
|          | 江頭 健輔 | 医学研究院 (病院兼任) |
|          | 水元 一博 | 病院           |
| 技術史      |       |              |
| 資源・素材・機械 | 渡邊公一郎 | 工学研究院        |
|          | 中西 哲也 | 博物館          |

## フィールドミュージアム部 (2010年度)

陸生生物：大槻 恭一 (農・演習林)、大賀 祥治 (農・演習林)、薛 孝夫 (農・演習林)

水生生物：野島 哲 (理)

博物館教員：館長および専任教員

**協力研究員** (2009、2010年度)

相原安津夫 (九大名誉教授)、青木 義和 (九大名誉教授)、井澤 英二 (九大名誉教授)、井川 敏恵 ((独) 産業技術総合研究所特別研究員)、木船 悌嗣 (福大名誉教授)、三枝 豊平 (九大名誉教授)、平嶋 義宏 (九大名誉教授)、森本 桂 (九大名誉教授)、柳 哮 (九大名誉教授)、湯川 淳一 (九大名誉教授・元博物館長)、島田 允堯 (九大名誉教授)、寫 洪 (九大名誉教授、元博物館長)、小島 弘昭 (東京農業大学農学部准教授)、中山 慎也 (出雲市教育委員会 出雲市立第一中学校教諭)、中島 淳、本村 慶信、廣永 輝彦、小池 裕子 (2010-)、宮崎 克則 (2010-)

**専門研究員** (2010年度)

青木 大空、古賀 康士、矢野健太郎、村尾 竜起、麻生 由季、三田 敏治、杉本 美華、高橋 直樹、柳 真一、三田井克志

## Ⅲ. 事 業

### 1. 展 示

九州大学が、市民に開かれた大学としての責任を果たす一つの窓口として、大学で行っている教育・研究の成果を広く一般に公開・情報発信する目的で、各種の展示を行っている。

#### A. 常設展示

2007年10月の博物館の旧工学部本館3階への移転に伴い、本館での常設展示室の設置を計画し、2008年3月に第9番講義室を改修し、5月8日に梶山千里総長・全理事の出席のもと、開設セレモニーを行なった。開設時間は平日の10:00～16:30。展示面積は約208㎡。展示品は、学内各部局および総合研究博物館に収蔵される考古学資料、記録史料、化石標本、岩石・鉱物標本、動物標本、植物標本、昆虫標本、技術史資料の中から、貴重で興味深く教育効果の高い標本・資料類を選んで展示した。2008年度から本展示室を利用して芸術工学部の演習授業が始まったほか、各学部の授業での利用が増えつつある。

#### B. 平常展示

常設展示室の開室に伴い、当館の創設以来50周年記念講堂2・3階で実施してきた展示を「平常展示」と呼ぶことになり、一部の展示替えを実施した。

##### 「九州大学所蔵鉱山関連資料展」

会 期：2009年5月1日～

会 場：50周年記念講堂2階ホワイエ

##### 「大塚勲と熊本県の昆虫展」

会 期：2010年3月26日～

会 場：50周年記念講堂2階ホワイエ

#### C. 公開展示

創設以来、学外の施設を借用して年に一回実施する、一般向きで規模の大きな展示を「公開展示」と呼んでいる。資料部を通して学内諸部局に研究成果の発表を依頼している。

##### 第11回（平成21年度）公開展示「昆虫のヒミツ」

（第3回少年科学文化会館・九州大学総合研究博物館合同企画展）

会 期：2009年7月18日（土）～8月31日（月）休館日7月21日（火）、31日（金） 9:00～17:00

会 場：福岡市立少年文化会館1階学習室

主 催：九州大学総合研究博物館・福岡市立少年文化会館

入場者数：23,321名

- 内 容：・工作ひろば ・昆虫のぬり絵をしよう ・切り絵で昆虫を作ろう  
・カイコのまゆで人形を作ろう
- ・もよおしもの「世界の昆虫」(烏山邦夫氏収集標本) 公開「昆虫標本作製教室」8/22(土)、23(日) 10:00/13:00からの各回先着30組
  - ・「昆虫博士が虫の名前を教えます」8/29(土) 10:00~12:00/14:00~16:00

#### 第12回(平成22年度)公開展示「人のからだ・動物のからだ」

(第4回少年科学文化会館・九州大学総合研究博物館合同企画展)

会 期：2010年7月21日~8月30日

会 場：福岡市少年科学文化会館 1階学習室

主 催：九州大学総合研究博物館・福岡市立少年文化会館

入場者数：23,998名

内 容：人の体や動物の体を素材として活躍している九州大学の先生方の研究を判り易く展示した。からだの形態や機能、生理、病気、比較解剖、進化、形質人類学、3D情報の取り込みやCGでの再現、再生医療、知能機械、ロボットなど、幅広い分野を扱った。パネルによる解説に留まらず、標本や模型、映像、研究紹介ビデオ、研究成果品などを見て・触れて・実感できる展示とした。

#### D. 特別展示

大学内の施設で年に数回実施する小規模な展示を「特別展示」と呼んでいる。研究成果のやや専門的な紹介や九大所蔵標本の公開を主とする。

#### 「九州大学教育・研究の最前線―第8回P&P研究成果一般公開―」

会 期：2009年5月8日(金)~6月5日(金)

時 間：平日10時~16時30分 土・日12時~16時30分

会 場：博物館本館常設展示室(旧工学部本館3階)

共 催：九州大学総合研究博物館・研究戦略委員会

内 容：九州大学の研究を代表するP&P採択課題のうち8課題の研究成果を分かりやすい形でパネル等により一般公開する。

「調停技法の小学校導入にむけたトライアル・プロジェクト」

「デジタルブレイン教育研究生拠点の形成」

「国際交換講義およびインターナショナル・ファカルティデベロップメント(IFD)によるグローバル教育システムの構築」

「インストラクショナルデザインに基づいた高校「生物」未履修対策自習プログラムの開発」

「環境ホルモン・ビスフェノールA受容体の作用発現機構解析と新リスク評価法の確立」

「新奇細胞毒素を利用したBt菌バイオ研究新領域への総合展開」

#### 「九州大学教育・研究の最前線―第9回P&P研究成果一般公開―」

会 期：2010年5月10日~6月6日

会場：旧工学部本館3階

共催：九州大学総合研究博物館・研究戦略委員会

内容：九州大学の研究を代表するP & P採択課題のうち15課題の研究成果を分かりやすい形でパネル等により一般公開する。

「DNA複製研究の次世代教育プログラム」代表 釣本敏樹（理学研究院）

「九州圏構造生物学研究拠点形成を目指した九州大学における研究・教育コンソーシアム形成」代表 神田大輔（生体防御医学研究所）

「中国西南地区における北方系青銅器文化の生成と展開」代表 宮本一夫（人文科学研究院）

「九州大学博物館展示を利用した実践的研究—アウトリーチ活動のあり方と大人と子どもの間の関わりを促すツール開発—」代表 三島美佐子（総合研究博物館）

「生命倫理を主題とする内容重視の言語指導素材・プログラム開発」代表 松村瑞子（言語文化研究院）

「脳を語ろう—市民コンセンサス会議福岡—」代表 飛松省三（医学研究院）

「関知レバーの椅子物語—日本における開発と普及を中心として—」代表 石村真一（芸術工学研究院）

「地域市民を対象としたカウンセリングならび心理臨床サービスの実践プロジェクトとニーズの検討」代表 田嶋誠一（人間環境学研究院）

「蛍光寿命イメージングとケミカルサイトメトリーによる細胞内現象の迅速計測」代表 金田隆（工学研究院）

「東アジア熱帯亜熱帯沿岸生態系の群集構造の解明」代表 渡慶次陸範（理学部附属天草臨海実験所）

「大学における効果的なヘルスプロモーションの展開とその評価」代表 上園慶子（健康科学センター）

「森林における長期生態研究を核とした教育研究基盤の整備」代表 榎木 勉（農学研究院）

「ICTを活用した洞察力育成医療教育」代表 吉浦一紀（歯学研究院）

「大学院生による国際シンポジウム「九州ブレイン・デイズ」の開催」代表 野田百美（薬学研究院）

「レーザー操作による有機・バイオ集積体のオンデマンド構築技術の開発」代表 森川全章（工学研究院）

## E. 施設一般公開

通常公開していない第一分館、第一会議室、列品室等を一般公開する。

総合研究博物館第一分館：貴重地質・鉱物標本（高標本）

主催は理学研究院。地球惑星科学教室が保存している鉱物・岩石・鉱石・化石標本の一部を展示している標本室の一般公開。我が国の3大鉱物標本の一つ高壮吉標本を含む。

2009年5月11日 学記念行事学内研究施設公開

2010年7月31日～8月1日 科学の公園 in 九州大学箱崎キャンパス

2010年8月7日～8月9日 九大オープンキャンパス

2010年8月17日～8月18日 子供大学博物館見学デー

2010年11月13日 フクオカサイエンスマンス

2010年11月20日 九州大学ホームカミングデイ

#### 総合研究博物館第一分館：骨格標本室

貴重な古人骨資料60体・脊椎動物骨格標本200体の公開。古人骨は日本人起源問題の解明に用いられた重要資料。動物骨格は希少種を含む九州有数のコレクション。

2009年5月11日（月） 10：00～16：00 学記念行事学内研究施設公開

2010年5月11日（火） 10：00～16：00（一部16：30） 学記念行事学内研究施設公開

2010年8月7日～8月9日 九大オープンキャンパス

2010年8月17日～8月18日 子供大学博物館見学デー

2010年11月20日（土） 10：00～16：00 九州大学ホームカミングデイ

#### 旧工学部本館3階：工学部列品室

旧工学部の資源系の研究室の教育研究収蔵展示。鉱山機械、鉱石等。

2009年5月11日（月） 10：00～16：00 学記念行事学内研究施設公開

2010年5月11日（火） 10：00～16：00（一部16：30） 学記念行事学内研究施設公開

2010年8月17日～8月18日 子供大学博物館見学デー

2010年11月20日（土） 10：00～16：00 九州大学ホームカミングデイ

#### 旧工学部本館4階：第二会議室

帝国大学時代の雰囲気を残す豪華な会議室で、青山熊治画伯の巨大な油絵が有名。

2009年5月8日（金）～5月17日（日） 2：00～16：30 学記念行事学内研究施設公開

2010年5月10日（月）～5月17日（月） 2：00～16：30 学記念行事学内研究施設公開

2010年8月17日～8月18日 子供大学博物館見学デー

2010年11月20日（土） 10：00～16：00 九州大学ホームカミングデイ

#### 総合研究博物館第一分館：旧知能機械実習工場

旧工学部の機械実習工場、歴史的な工作機械と鑄造実習室。

2010年11月20日（土） 10：00～16：00 九州大学ホームカミングデイ

## F. サテライト展示

箱崎地区が集客上やや難があるため、当館の存在や活動を知ってもらうべく、学外の数か所の施設を借用して小規模の展示を行っている。

### a. 福岡空港第1ターミナル2階待合室

「化石のヒミツⅢ」：2009年2月5日～2009年6月14日

「化石のヒミツⅣ」：2009年6月15日～2009年10月27日

「化石のヒミツⅤ」：2009年10月28日～2010年3月8日

- 「化石のヒミツⅥ」：2010年3月9日～2010年8月18日  
 「化石のヒミツⅦ」：2010年8月19日～2011年1月25日  
 「化石のヒミツⅧ」：2011年1月26日～2011年5月26日（予定）

**b. 前原市伊都文化会館玄関ロビー**

- 「飯塚市山ノ古墳」：2009年1月4日～3月3日  
 「京都郡番塚古墳」：2009年3月4日～5月8日  
 「対馬ガヤノキ遺跡」：2009年5月9日～7月3日  
 「対馬塔の首遺跡」：2009年7月4日～9月5日  
 「一支国カラカミ遺跡」：2009年9月6日～11月1日  
 「一支国原の辻遺跡」：2009年11月2日～2010年1月9日  
 「末廬国宇木汲田遺跡」：2010年1月9日～3月13日  
 「伊都国三雲遺跡」：2010年3月13日～5月7日  
 「奴国須玖岡本遺跡」：2010年5月7日～8月22日  
 「奴国板付遺跡」：2010年8月22日～2011年10月16日  
 「八女市岩戸山古墳」：2010年10月16日～2011年1月16日  
 「一支国原の辻遺跡」：2011年1月16日～2011年3月27日  
 ケテーテス海綿石板：2011年3月27日～

**c. 福岡市保健衛生研究所「まもる一む福岡」**

- 「植物をもっと知ろうⅣ」：2009年1月21日～11月12日  
 「川と海の生命Ⅰ」：2009年11月13日～2010年12月21日  
 「川と海の生命Ⅱ」：2010年12月21日～

**d. 志摩町総合保健福センター「ふれあい」**

- 「対馬塔の首遺跡」：2009年1月4日～3月3日  
 「一支国カラカミ遺跡」：2009年3月4日～5月8日  
 「一支国原の辻遺跡」：2009年5月9日～7月3日  
 「末廬国宇木汲田遺跡」：2009年7月4日～9月5日  
 「伊都国三雲遺跡」：2009年9月6日～11月2日  
 「奴国須玖岡本遺跡」：2009年11月2日～2010年1月9日  
 「奴国板付遺跡」：2010年1月9日～3月13日  
 「八女市岩戸山古墳」：2010年3月13日～5月8日  
 「行橋市琵琶隈古墳」：2010年5月7日～8月22日  
 「飯塚市山ノ神古墳」：2010年8月22日～10月16日  
 「一支国原の辻遺跡」：2010年10月16日～11月19日  
 「京都郡番塚古墳」：2010年11月19日～2011年1月16日  
 「ケテーテス海綿石板」：2011年1月16日～3月26日  
 「放散虫化石」：2011年3月27日～

e. 二丈町健康ふれあい施設「二丈温泉きららの湯」

「伊都国三雲遺跡」：2009年1月4日～2009年3月3日

「奴国須玖岡本遺跡」：2009年3月4日～5月8日

「奴国板付遺跡」：2009年5月9日～7月3日

「八女市岩戸山古墳」：2009年7月4日～9月5日

「行橋市琵琶隈古墳」：2009年9月6日～11月1日

「飯塚市山ノ神古墳」：2009年11月2日～2010年1月8日

「京都番塚古墳」：2010年1月9日～3月13日

「対馬ガヤノキ遺跡」：2010年3月13日～2011年1月15日

「中山平次郎と今日の石斧」：2011年1月16日～

f. 志摩歴史資料館

ケテーテス海綿石板：2010年11月19日～2011年2月1日

放散虫化石：2011年2月1日～

G. 特別企画

上記までのカテゴリに属さない催事であり、展示に限らない内容である。

名護屋城博物館と九州大学総合研究博物館との協働・連携事業

「学生が企画した『通信使海道』展」

博物館教員が文学部で開講している「博物館学実習Ⅳ」で指導している受講生7名と佐賀県立名護屋城博物館が協力して、「学生が企画した『通信使海道』展」を企画・実施した。資料の選定、展示の構成、パンフレット編集、実際の展示に至るまで、全過程を学生と学芸員がともに取り組んだ。

会 期：2009年2月19日～4月4日

会 場：佐賀県立名護屋城博物館 企画展示室

主 催：佐賀県立名護屋城博物館、九州大学総合研究博物館

九大博設立10周年特別展示「光が泳ぐ場所」

会 期：2010年5月10日～5月21日 12：00～17：00（最終日のみ20：00まで）

会 場：旧工学部本館5・6階

内 容：現在博物館が入っている旧工学部本館には、かつて展望室だったという特異な空間がある。普段あまり使われていないその場所は、少しさびれた中にも何故か私たちが惹き付けるものがある。箱崎在住のアートユニット・QULTE とのコラボレーションにより、場所の固有性と九大博の魅力的な収蔵物との響き合いを求め、「光・美・場」をテーマに、これまでの九大博にない展示手法（インスタレーション＝空間全体を作品とした表現方法）に挑戦する企画展示第一段である。

九大博設立10周年特別展示「科学のえほんとハカセたち」

会 期：2010年6月10日～8月31日

会 場：旧工学部本館 3 階常設展示室

内 容：少年科学文化会館での公開展示「人のからだ・動物のからだ」と連動し、「ひとのからだ」や「しぜん」をテーマにした科学絵本を展示・紹介した。同時に「ハカセ」の展示として、昨年サイエンス・カフェで講演した九大の先生達をミニパネルで紹介した。

#### 九大博設立10周年特別展示「ツノゼミの世界展」

会 期：2010年7月27日～8月20日

会 場：旧工学部本館 3 階

内 容：ツノゼミと言う奇妙な形態の昆虫を紹介する展示。小さいため、深度合成法という全体にピントの合った写真を大きく印刷し、標本とともに展示した。

#### 九大博設立10周年特別展示「ツノゼミと世界の昆虫展」

会 期：2010年11月20日～2011年1月30日

会 場：志摩歴史資料館

内 容：「ツノゼミの世界展」が予想以上の好評を博したため学外での展示を実施した。

#### 九大博設立10周年特別展示「驚異の造形ツノゼミの世界」展

会 期：2010年11月20日～2011年3月13日

会 場：石川県ふれあい昆虫館

内 容：「ツノゼミの世界展」が予想以上の好評を博したため学外での展示を実施した。

#### 九大博設立10周年特別展示「箱崎残像—MACHINA—」

会 期：2010年11月20日

会 場：総合研究博物館第一分館倉庫

内 容：第一分館倉庫はかつて工学部の機械実習工場であったが、平成18年の当館への移管後公開活用してこなかった。しかし平成22年度春に催事会場（サイエンスカフェ）として活用を始めたところ好評であったことから、今後3年計画で、第一分館倉庫の歴史的な工作機械と鑄造実験室の「状態展示」を実施し、他所にない空間展示を目指す。「状態展示」とは、そこにもともとあった建物や設備をその状態のまま展示することを言う。今回は、ホームカミングデイに際して開催した。

#### ホームカミングデー2010での博物館紹介展示

会 期：2010年11月20日

会 場：21世紀交流プラザ 2 階会議室

内 容：九大の学術標本および博物館建設計画の紹介パネルを展示し、鉱山関連模型 6 台を展示した。

#### 総合研究博物館創立10周年記念フォーラムに伴う博物館紹介展示

会 期：2011年3月25日～31日、10：00～16：30

会 場：旧工学部本館 3 階301・340・341号室

内 容：九大の学術標本および博物館建設計画の紹介パネルを展示し、あわせて学術標本拡大写真（20枚）、標本紹介映像、および博物館を用いた新たな試みの紹介ポスターを展示した。

## H. 巡回展示

2010年度から新たに始まった巡回展示

### 「みんなでつくる！ミュージアム」プロジェクト：博物館建設に向けた取り組み

糸島地区を中心に、学外における九大博物館の認知度と理解を高め、九大伊都キャンパスにおける博物館建設の機運を醸成するために、従来のサテライト展示と異なり標本主体の巡回展示を、平成22年度から開始した。それに伴って標本作成講座やセミナーも予定している。また一般の人々が求めるこれからの生涯学習の「場」とともに考える巡回ワークショップも計画している。

### 伊都祭2010での博物館紹介展示

会 期：2010年5月29日（土） 10：00～17：00

会 場：伊都キャンパスウエスト2号館2階ロビー

内 容：当館を地元で紹介するため、九大が所蔵する多種多様な学術標本・資料と博物館建設計画をパネルで紹介し、あわせて昆虫・鉱物・考古資料（計約100点）および鉱山関連模型（3台）など実物資料も展示した。

## I. その他

### Qcafe2010・九大博10年スペシャル

2008年度の博物館実習から始まった行事で、九州大学の学生と教員によるボランティアな取り組みによって、科学的研究の成果を分かりやすく一般に普及している。2010年度からは九大博が中心となり、年間を通して開催している。2010年度当初には、10周年特別展示「光が泳ぐ場所」とタイアップしたシリーズ「夜カフェ」を開催し、九大の研究者が「光・美・場」にまつわる研究を話した。

場 所 第一分館倉庫

第一夜 「場と光を結ぶ、美しき数学の世界～素数たちが、真空の力を紡ぎ出す～」

演 者 若山 正人教授（数理学研究院） 日 時 2010年5月11日

第二夜 「空間と光が織りなす心のうつろい—照明の環境心理学から—」

演 者 大井 尚行准教授（芸術工学研究院） 日 時 2010年5月12日

第三夜 「描かれたアジアの女性たち」

演 者 後小路雅弘教授（人文科学研究院） 日 時 2010年5月13日

第四夜 「ポータブル3D映写スクリーンによるアーカイブの新しい見せ方—CGでさるく軍艦島—」

演 者 竹田 仰（芸術工学研究院） 日 時 2010年6月2日

### 公開授業「現代芸術特論：素敵な美術展の作り方」

2010年12月13日（月） 会 場：総合研究博物館第一分館倉庫

講義開始時刻 18時00分 終了予定時刻 20時00分（16時30分から開場しています）

福岡アジア美術館開設などの先駆的な取組で、福岡のアジア現代美術の波をリードしてきたお一人で

ある「展覧会屋」後小路雅弘先生（人文学研究院・博物館資料部兼任）による「現代芸術論特論」の1時限分を、AQA 韓日現代美術展「おとなりさん。」（箱崎会場）の展示会場にて公開いたします。人文科学府開講芸術学分野「現代芸術特論」教授 後小路雅弘「アジアの近代美術における基本的な課題である「モダニズム」と「ローカルカラー」をテーマに、アジアの近代美術家たちが、どのように相反するふたつの課題に取り組み、それを乗り越えて、ひとつの作品を創造したのかを探る。」

## 2. 開 示—情報発信—

### A. インターネットミュージアム

「九州大学教育・研究の最前線—第6回P&P研究成果—」をホームページ上に公開（2007年12月）

「どきどきわくわく化石のヒミツ展」をホームページ上に公開（2008年7月）

「九州大学教育・研究の最前線—第7回P&P研究成果—」をホームページ上に公開（2008年7月）

九州大学総合研究博物館 web サイト [<http://www.museum.kyushu-u.ac.jp/>] をリニューアル（2009年3月）

### B. 所蔵標本データベース

総合研究博物館では九州大学全学共通間接経費の配分を受けるとともに、博物館運営経費の中にも予算を組み、資料部兼任教員の協力を得て、資料整理・データベース化を進めてきた。現在までに下記のコレクションについてデータベース化を終え、博物館のホームページ上で一般に公開している。

### C. 出版・広報

九州大学総合研究博物館概要2007（日本語版）（2007年6月）

九州大学総合研究博物館ニュース No.9（2007年10月）

九州大学総合研究博物館年報 第2号（2007年10月）

九州大学総合研究博物館研究報告 第6号（2008年1月）

九州大学総合研究博物館概要2007（英語版）（2008年2月）

九州大学総合研究博物館ニュース No.10（2008年3月）

九州大学総合研究博物館ニュース No.11（2008年11月）

九州大学総合研究博物館ニュース No.12（2009年3月）

『奴国の南—九大筑紫地区の埋蔵文化財—』（2009年1月）

九州大学総合研究博物館研究報告 第7号（2009年3月）

## 3. 教 育

当館教員は大学内での教育に積極的に携わっている。学芸員取得コースの講義を担当するとともに、各教員の専門分野を生かして、学部・学府での講義を兼任の教員として担当している。

## A. 大学教育

## a. 学芸員資格関係

| 科 目        | 担 当 者     | 開 講 部 局 | 開 講 時 期   |
|------------|-----------|---------|-----------|
| 博物館概論      | 松隈・岩永     | 理学部     | 09前期・10前期 |
| 博物館経営論     | 岩永・松隈     | 理学部     | 09後期・10後期 |
| 博物館資料論     | 中牟田       | 理学部     | 09前期・10前期 |
| 博物館情報論     | 中西        | 理学部     | 09前期・10前期 |
| 視聴覚教育メディア論 | 中西        | 理学部     | 09後期・10後期 |
| 植物学標本実習    | 三島        | 理学部     | 09前期・10前期 |
| 地球惑星科学標本実習 | 松隈・中牟田・中西 | 理学部     | 09前期・10前期 |
| 博物館資料論     | 岩永        | 文学部     | 10前期      |
| 博物館学実習Ⅲ    | 宮崎        | 文学部     | 09前期      |
| 博物館学実習Ⅳ    | 宮崎        | 文学部     | 09後期・10前期 |

## b. 学部教育

| 科 目       | 担 当 者  | 開 講 部 局 | 開 講 時 期   |
|-----------|--------|---------|-----------|
| 地球の構成と環境  | 松隈(分担) | 全学共通    | 09後期      |
| 地球惑星生物学   | 松隈     | 理学部     | 09前期・10前期 |
| 古生物学      | 松隈     | 理学部     | 09後期      |
| 地球史生物史演習  | 松隈(分担) | 理学部     | 09前期・10前期 |
| 地球惑星科学実験  | 松隈(分担) | 理学部     | 09前期      |
| 結晶物理化学    | 中牟田    | 理学部     | 09後期      |
| 地球惑星物質科学  | 中牟田    | 理学部     | 10後期      |
| 考古学講義 XIV | 岩永     | 文学部     | 10後期      |

## c. 大学院教育

| 科 目        | 担 当 者  | 開 講 部 局  | 開 講 時 期   |
|------------|--------|----------|-----------|
| 進化古生物学     | 松隈     | 理学府      | 09前期      |
| 地球惑星物質科学演習 | 中牟田    | 理学府      | 09前期・10前期 |
| X線結晶学      | 中牟田    | 理学府      | 09前期・10前期 |
| 鉱物工学実験第一   | 中西     | 工学府      | 09前期・10前期 |
| 鉱物工学実験第二   | 中西     | 工学府      | 09前期・10後期 |
| 階級社会形成論Ⅰ・Ⅲ | 岩永     | 比較社会文化学府 | 09前期・10前期 |
| 階級社会形成論Ⅱ・Ⅳ | 岩永     | 比較社会文化学府 | 09後期・10後期 |
| 地域資料情報論Ⅲ   | 宮崎     | 比較社会文化学府 | 09通年      |
| 博物館情報科学特論  | 中西     | 芸術工学府    | 09集中(3月)  |
| 感性学入門      | 三島(分担) | 新学府プレ授業  | 09後期      |

## d. その他

| 大 学    | 担 当 者 | 科 目   | 開 講 時 期  |
|--------|-------|-------|----------|
| 福岡教育大学 | 岩永    | 考古学概論 | 09集中(8月) |

## B. 教育支援

第一分館2階の骨格標本室を、開学記念行事・公開講演会等に合わせて公開するとともに、学内各部署からの依頼に応じて適宜公開した。同建物1階の自然史資料室（高壮吉鉱物標本など）も、博物館への移管はまだであるが、適宜公開した。旧工学部本館3階の常設展示室は、2008年度から公開を開始し、芸術工学研究院による演習の場として提供したほか、学内各部署による授業での利用が増えつつある。

博物館所蔵標本資料の利用希望に対処するため、標本資料閲覧要綱（18年度制定）を定め、骨格標本については要綱に則って学生への閲覧を開始した。閲覧の希望は年々増えつつあり、骨格標本以外の館蔵資料の増加につれてますます増えると予想される。それらに対応する体制の整備が今後の課題である。

大型プリンターの開放、イベントパネルの貸し出しによる教育の支援を継続的に行なっている。大型プリンターは教員・学生から学会発表資料等の作成での使用希望が年々増加しており、極力要望にこたえるようにしている。

## 4. 研 究

教員個人の研究ではなく、博物館としての固有の研究テーマの追求に関わる事業・行事を紹介する。

### セミナー

#### 第6回博物館セミナー（自然史系）

「ブナを寄主とするタマバエ類の分類・生態・地理的分化」

日 時：2009年12月1日（火）16時－19時

場 所：箱崎キャンパス旧工学部5号館6階 統合新領域学府第3講義室

話題提供：

日浦 勉（北海道大学）「ブナの形態地理変異に基づく冷温帯林生態系機能と生物多様性の地理的分布」

陶山 佳久（東北大学）「ブナの遺伝的地域性」

佐藤 信輔（宮崎大学）「ブナに寄生するタマバエ類の分類と多様性」

中村 誠宏（北海道大学）「ブナ葉を利用する食植性昆虫の緯度勾配」

三島美佐子（九州大学）「ブナカイガラタマバエの同所的種分化」

#### 第7回博物館セミナー（ミュージアムマネジメント系）

日 時：2009年12月15日（火）18時－19時30分

場 所：箱崎キャンパス旧工学部本館3階 総合研究博物館常設展示室

「指定管理者制度とボランティア」 加留部貴行（統合新領域学府・特任准教授）

#### 第8回博物館セミナー（ミュージアムテクノロジー系）

「学術標本3D デジタル情報の、半自動データ取得システム確立とVR展示への応用・評価」

日 時：2010年9月13日（月）17時00分－18時30分

場 所：九州大学箱崎キャンパス 50周年記念講堂3階博物館展示室

プログラム：

「研究課題紹介—学術標本資料の3Dアーカイブの必要性と問題点」代表者 三島美佐子（総合研究博物館・助教）

「九州大学総合研究博物館における骨格標本類」分担者 岩永省三（総合研究博物館・教授）

「ヒト骨格研究の最近のトピックスと今後の展開」協力者 田中良之（比較文化社会学研究院・教授）

「近年の動物形態研究および基礎教育における課題」協力者 毛利孝之（農学研究院・名誉教授）

「3Dアーカイブデータの展示コンテンツへの展開」分担者 竹田 仰（芸術工学研究院・教授）

総合討論 15分程度

九州大学研究教育プログラム・研究拠点形成プログラム（P&P）事業

第1回セミナー 展示理論と実践～学芸員と展示業者の対話～

日 時：2010（平成22）年1月22日（金） 13時～16時

場 所：西南学院大学博物館2階講堂

開催趣旨：展覧会は学芸員の長年の調査研究の蓄積をもとに作られていくものであり、これにあわせて来館者視点からより興味をもたせる展示空間を完成させていく。学芸員の意向はもとより、展示空間を彩るデザイナーの役割は一層大きくなってきている。博物館・美術館に関心を向けさせ、来館者を満足させられる展示とは何か。展示を行なうデザイナーとしての視点と現場を指揮する学芸員の視点、双方の見方により、いかに展示空間は作られるのか実践報告を含めて検討していく。

実践報告：

「近現代美術の展示について～福岡アジア美術館の場合～」山木裕子氏（福岡アジア美術館・学芸員）

「歴史系博物館の展示～ストーリーを伝えるには～」安高啓明氏（西南学院大学博物館・学芸員）

「自然史系博物館の大空間展示」岡崎美彦氏（北九州市立自然史・歴史博物館・学芸員）

講 演：「関係をつくる空間の作り方」岡 大輔氏（株式会社環境デザイン機構）

第2回セミナー 最新LED展示照明の理論と実際～根津美術館の試み～

日 時：2010（平成22）年2月8日（月） 13時～16時

場 所：九州大学大橋サテライト

開催趣旨：LEDは、UVを発しない・帯熱しない・単波長などの特徴を持ち、展示物の保全・光調節の自由度・コスト面等から、次世代展示照明として注目されています。展示照明として、従来の照明とはどのように異なるのか、また導入のコンセプトはどうあるべきか。そして展示品はどのように引き立つのか。今回は、2009年10月にリニューアルオープンしたさい、展示ケース内の照明全てに特製LEDを導入した根津美術館の試みをお伺いするとともに、最新LED展示照明の理論と実際について学びます。

講 演：「根津美術館の試み」西田宏子氏（根津美術館・副館長／学芸部長）

「LED照明の原理と美術品向けのLED照明開発」豊久将三氏（株式会社キルトプランニングオフィス）

デモ機による照明比較

## 5. 社会貢献

### A. 公開講演会

#### 2009年度

##### 第一部 月の起源と進化

1. スーパーコンピュータで探る月誕生の秘密 国立天文台理論研究部 小久保英一郎
2. 隕石研究と衛星探査によって解き明かされた月の姿 東京大学名誉教授 武田 弘

##### 第二部 九州大学における宇宙研究

3. 「ΠΛΑΝΗΤΗΣ」は作り話ではない？ 地球低軌道における宇宙ごみ環境の不安定性について 九州大学工学研究院 花田 俊也
4. 宇宙天気予報の最前線 九州大学宙空環境研究センター 湯元 清文

開催日：2010年3月14日（日） 時 間：13：00～17：00（開場12：30）

場 所：九州大学箱崎キャンパス旧工学部本館3階第1会議室

テーマは、「月と宇宙」 2009年は「アポロ11号」の月面初着陸から40周年を迎え、また日本の月探査衛星「かぐや」が月に行き膨大なデータを送ってきました。これを記念し、九州大学総合研究博物館の2009年度の公開講演会は、月と宇宙をテーマとして行うことにしました。

#### 2010年度

九州大学総合研究博物館創立10周年記念フォーラム「どうする、どうなる!? 九大の標本資産—これからの博物館と運営のあり方—」

日 時：2011年3月26日（土） 13：00～17：00

会 場：旧工学部本館3階第一会議室

主 催：九州大学総合研究博物館

内 容：第一部「九大と九大博物館の現状」

松隈 明彦（総合研究博物館・館長）

寫 洪（九州大学名誉教授）

坂井 猛（九州大学新キャンパス計画推進室教授・副室長）

第二部「博物館をとりまく現状」

上田恭一郎（北九州市立自然史・歴史博物館学芸担当部長）

高橋 信裕（文化環境研究所所長）

第三部「これからの大学博物館戦略と博物館建設に向けて」

総合討論コメンテーター

上田恭一郎、栗原 祐司（文化庁美術学芸課長）、坂井 猛、高橋 信裕、寫 洪、

竹田 仰（次期総合研究博物館長）、松隈 明彦

同時開催：九大博紹介特別展示：2011年3月25日～31日：10：00～16：30

旧工学部本館3階301・340・341号室

### B. コミュニケーションミュージアム事業（九大糸島会・総合研究博物館）

九州大学を伊都キャンパスの地元で紹介し、地元の理解と支援を得るとともに、大学の教職員・学生

が地元を知るために、地域資源再発見塾・会員交流事業・ふれあいバスツアーなどを継続的に行なっている。

### みんなで作ろうミュージアム・プロジェクト

平成21年度まで5年間実施した「コミュニケーション・ミュージアム事業」が終了したため、糸島市と連携する後継事業として、糸島地区を中心に学外における当館の認知度を高め、伊都キャンパスにおける博物館建設の機運を醸成するために、社会連携事業「みんなで作ろうミュージアム・プロジェクト」を開始し、標本主体の巡回展示を開始した。会場は、糸島市伊都文化会館、二丈町健康ふれあい施設「二丈温泉さららの湯」、志摩歴史資料館に設け、数回展示替えを行った。

### その他

#### a. “科学の公園 in 九州大学箱崎キャンパス” での「地球カフェ」の実践

会 期：2010年7月31日～8月1日

会 場：50周年記念講堂4階会議室

内 容：任意団体「科学の公園をつくる会」が実施した科学イベント「科学の公園 in 九州大学箱崎キャンパス」に際してプログラム“「地球カフェ」映像と実感で体感、すごいぞ！「グランドキャニオン」”を実施し、実施時のファシリテーターは統合新領域学府ユーザー感性学専攻の大学院生が務めた。

#### b. 糸島市図書館体験教室

日 時：2010年8月26日 13：00～16：30

会 場：糸島市笠山公園、伊都文化会館

主 催：糸島市図書館

演 題：「やってみよう！貝の採集・標本作りと観察」

小学生の夏休み体験教室。笠山公園で陸にすむ貝を採集・観察し、伊都文化会館で観察を行った。

#### c. 科学イベント「世界一行きたい科学広場 in 宗像」へのブース出展「九大博物館のホンモノ標本でチャレンジ！一見よう・描こう・比べよう！」

日 時：2010年10月30日 10：00～14：45

会 場：東海大学福岡キャンパス

内 容：東海大学付属第五高等学校、東海大学教育開発研究所、東海大学福岡短期大学、宗像市、NPO法人ガリレオ工房、SAFnet が実行委員会となり企画した科学イベントに展示ブースを出展し、当博物館の標本を利用して、科学の基本的部分を伝えることをめざした。実施時のコミュニケーションは統合新領域学府ユーザー感性学専攻の大学院生が務めた。

#### d. 宗像植物友の会への出張講演

日 時：2011年2月10日 10：00～12：00

会 場：宗像市市民活動交流館メイトム宗像

主 催：宗像植物友の会

演 題：「キノコの話」福原美恵子

## 6. 連 携

### 学内他部局との連携

#### 教育研究における連携

##### 演習連携事業（「みんなでつくる！ミュージアム」プロジェクト）

学内で、博物館実習や人間環境学府・統合新領域学府や芸術工学府の演習において、伊都での博物館活動を想定したパイロット企画や建物デザインを課題に取り上げた授業に協力した。

##### a. 人間環境学府との連携

人間環境学府・空間システム専攻・建築計画学コースの設計実習授業「建築デザインスタジオ」で「九州大学の新博物館構想」を課題として取り上げて頂き、4チームが設計を競い数回の講評会を実施した。

##### b. 統合新領域学府との連携

2011年2月20日（日）

“JST 草の根型 五感を使って楽しむ おしゃべりサイエンス教室”に参加する統合新領域学府ユーザー感性学専攻学生の企画に協力し、骨格標本室と標本を提供し活用して頂いた。

##### c. 芸術工学部・芸術工学府との連携

芸術工学部・生活空間造形論演習「伊都キャンパスにおける博物館の展示室とロビーのデザイン」、および芸術工学府・ストラテジック・アーキテクト・プロジェクト演習「ミュージアム・デザイン」に協力し、伊都での博物館建物建設を念頭に置いた空間デザインを課題に取り上げた授業に協力した。2010年8月6日（金） 9：30～12：30には、両授業の成果発表が実施された。

##### d. 人文学部との連携

#### 韓日現代美術展「おとなりさん。」

会 期：2010年12月6日～12月13日、2011年1月22日～1月30日

会 場：総合研究博物館第一分館倉庫

主 催：福岡市、（財）福岡市文化芸術振興財団、九州大学文学部、AQA プロジェクト

共 催（箱崎会場）：九州大学総合研究博物館、九州大学女性研究者キャリア開発センター

内 容：九州大学文学部で美学美術史・美術館学を学ぶ学生たちが、社会的研究実践として美術館諸活動を行い社会との連携を目指す「AQA プロジェクト」による美術展示に、箱崎会場として博物館第一分館倉庫を提供した。韓国・日本の若手現代美術アーティストの作品で展覧会を構成し、韓国と日本の国同士の関係、個人同士の関係の表現を追究した。本プロジェクト福岡市文化芸術振興財団の支援を受け、大学と自治体の連携を構築する意義も持つ。

公開授業「現代芸術特論：素敵な美術展の作り方」

会 期：2010年12月13日

会 場：総合研究博物館第一分館倉庫

内 容：福岡アジア美術館開設などの先駆的取り組みで、福岡でのアジア現代美術理解を推進してきた後小路雅弘氏（人文科学研究院）による「現代芸術論特論」の1時限分を、韓日現代美術展「おとなりさん」（箱崎会場）の展示会場で一般に公開した。

## IV. 専任教員の研究活動

松隈明彦 (まつくま あきひこ)

Akihiko MATSUKUMA

分析技術開発系・教授

### 〈研究概要〉

#### ①二枚貝綱の分類学的研究

インド-西太平洋海域における Glycymerididae 等数科の種多様性、起源、種分化について形態形質と生物地理、及び分子生物学的情報を基に考察する。

#### ②逆転現象に基づく種分化の研究

二枚貝の種内における正常個体と逆転個体の比率を基に、化石集団の進化を考察する。

#### ③日本産陸産貝類の起源に関する研究

福岡県の陸産貝類相を記載し、環境の保全に基礎的なデータを提供する。

#### ④外来性貝類の起源と移動に関する研究

外来種の侵入方法、国内での移動方法とそのスピード、生殖様式を調べ、既存の生態系への影響、栽培植物への食害、今後の個体群の動向を推定する。

### 〈所属学会〉

日本貝類学会、日本古生物学会、Western Society of Malacologists (アメリカ)

### 〈学外委員等〉

日本貝類学会 (副会長2001.1~2011.3、会長2011.4~)

西宮市貝類館顧問 (2009.4~2010.3、2010.4~2011.3)

西宮市貝類館運営委員 (副委員長2008.11~2009.5、2009.6~2009.10、2009.11~2010.5、2010.6~2010.10、2010.11~2012.5)

福岡県希少野生生物保護検討会議委員 (貝類部会長2007.9~2015.3)

### 〈海外渡航〉

2011.6.11 - 6.15、韓国鬱陵島、ヤマボタルガイ等陸産貝類の採集

2011.10.20 - 10.31、ポルトガル・スペイン、オオクビキレガイの採集

### 〈研究業績〉

#### 〈原著論文〉

Ujino, S. and Matsukuma, A., 2011. Re-establishment of life orientations in five infaunal bivalve species in soft substrata. *Molluscan Research*, **31**(1): 21-29.

Kong, L., Matsukuma, A., Hayashi, I., Takada, Y. & Li, Q., 2010. Taxonomy of *Macridiscus* species (Bivalvia:Veneridae) from the western Pacific: insight based on molecular evidence, with description of a new species. *Journal of Molluscan Studies*, **78**(1): 1-11.

Ujino, S. and Matsukuma, A., 2010. Inverse life positions of three species of the genus *Cadella* (Bivalvia: Tellinoidea). *Molluscan Research*, **30**(1): 25-28.

Ujino, S. and Matsukuma, A., 2009. Trends in life orientations of 9 infaunal bivalve species based on quantitative measurement data. *Venus (Japan. Jour. Malac.)*, **68**: 39-54.

松隈明彦・武田悟史、2009. 外来種オオクビキレガイ（軟体動物門腹足綱）の日本での分布状況と移動方法. 付録—農林水産省植物防疫所植物検疫統計—輸入植物検査病菌・害虫発見記録（1997～2007）の軟体動物. 九州大学総合研究博物館研究報告、7号：35-84.

氏野 優・松隈明彦・三島美佐子、2009. 分子系統解析に基づくニッコウガイ上科における生息姿勢の進化. *Venus*, vol. 68 (1-2) : 79.

武田悟史・松隈明彦・三島美佐子、2009. 移入種オオクビキレガイの起源と移動. *Venus*, vol. 68 (1-2) : 86.

〈講演・口頭発表〉

2009. 11. 18 松隈明彦：最近日本に侵入した外来貝類、中国海洋大学・海洋大学交流中心 (Prof. Li Qi, Fisheries College, Ocean University of China, Yushan Road 5, Qingdao 266003, China)

2009. 11. 28 松隈明彦：糸島の自然、講演会「糸島を知ろう！～前原・志摩・二丈の魅力～」、前原市図書館・伊都文化会館

2010. 1. 30 江口泰教・松隈明彦・氏野 優：鹿児島県獅子島東部における二枚貝化石群集を用いた堆積環境の復元、日本古生物学会、第159回例会、滋賀県立琵琶湖博物館

2010. 1. 31 氏野 優・松隈明彦：殻形態に基づくニッコウガイ上科の生息姿勢の推定、日本古生物学会、第159回例会、滋賀県立琵琶湖博物館

2010. 1. 31 松隈明彦：最近糸島地域に入ってきた貝の外来種、松隈農地環境整備組合環境保全講演会、糸島市志摩松隈公民館

2010. 3. 1 松隈明彦：最近日本に侵入した外来の陸貝オオクビキレガイ、山口県下関市立豊田ホテルの里ミュージアム

2010. 7. 11 松隈明彦：外来の陸貝オオクビキレガイ糸島にはいる、はまぼうの会講演会、糸島市屎尿処理センター

2010. 11. 21 松隈明彦：最近のオオクビキレガイの拡散状況、阪神貝類談話会11月例会、西宮浜公民館

2011. 6. 23 松隈明彦：大山文庫の整理・公開事業、博物科学会2011年大会、名古屋大学

2011. 7. 28 松隈明彦：貝の体の作りと生活、九大・糸島会講演会、糸島市志摩歴史資料館

2011. 8. 20 松隈明彦：二枚貝の解剖、西宮市貝類館

2012. 2. 19 松隈明彦：オウムガイからアンモナイトの絶滅を考える、東京貝類同好会総会、文京シビックホール

2012. 3. 4 松隈明彦：オウムガイからアンモナイトの絶滅を考える、九州大学総合研究博物館公開講演会、九州大学旧工学部本館

2012. 3. 18 松隈明彦：オウムガイの形と姿勢—アンモナイト絶滅のヒミツ、阪神貝類談話会、西宮浜公民館

岩永省三 (いわなが しょうぞう)

Shozo IWANAGA

一次資料研究系・教授

## 《研究概要》

日本の弥生時代から8世紀に至る社会を主要な研究対象とし、以下の諸問題を研究している。①弥生時代青銅器の形態・機能上の特質の形成要因。②階級社会及び古代国家の形成過程に関する諸理論。③日本における階級社会・古代国家の形成過程の具体像および東アジア他地域との比較。④日本古代都城制の成立・変容の過程とその特質の成因。⑤都城の国家的施設の構造や機能からみた王権の特質。⑥仏像彫刻・瓦埴類の様式変遷とその歴史的背景。

## 《所属学会》

日本考古学協会、九州考古学会、木簡学会

## 《研究資金》

科学研究費・基盤研究（C）、古墳時代の変容過程の研究、2006～2009年度、岩永省三

## 《研究業績》

岩永省三、2010年3月、弥生時代における首長層の成長と墳丘墓の発達、『九州大学総合研究博物館研究報告』第8号、福岡。pp.17-42

岩永省三、2010年11月、大嘗宮移動論補説、『坪井清足先生卒寿記念論文集』下巻、奈良。1043-1051

岩永省三、2011年3月、「弥生時代開始年代再考Ⅱ—青銅器年代論から見た—」『九州大学総合研究博物館研究報告』第9号、福岡。pp.9～18

## 〈学会発表〉

Interaction between the Korean peninsula and the Japanese Archipelago during the Yayoi Period. Shozo Iwanaga, Early Korea project Workshop (Early Korea Project at the Korea institute, Harvard University), 2010. 5. 3

## 《活動実績》

### 〈海外渡航〉

アメリカ合衆国、2010年5月2日～5月10日、ハーバード大学 Korea Institute, Early Korea Project における研究発表

### 〈講演等〉

岩永省三、弥生時代の青銅器、尼崎市立田能資料館体験学習会『銅剣づくり』、尼崎市立田能資料館、2009. 10. 25

岩永省三、青銅器からみた松慮国・伊都国・奴国、伊都学講座、西部地域交流センターサイトピア（福岡市西区）、九州大学比較社会文化研究院、2010. 11. 03

### 〈学内委員会等〉

新キャンパス計画委員会、文化財WG委員2002年～、WG長2009年～。

埋蔵文化財調査委員会、委員2009年～、埋蔵文化財WG長2010年～。

### 〈学外委員会等〉

春日市文化財専門委員会委員、2001年1月～継続中

島根県古代文化センター客員研究員、～2010年7月3日

福岡市文化保護審議会委員、2010年5月～継続中

### 〈展示・催事等担当（学内外）〉

中山平次郎先生関係資料展、平成21年5月8日～6月5日

古人骨資料・動物骨格標本一般公開、平成21年5月11日

古人骨資料・動物骨格標本一般公開、平成22年5月11日、11月20日

## 中牟田義博 (なかむた よしひろ)

Yoshihiro NAKAMUTA

一次資料研究系・准教授

### 《研究の紹介》

微小試料のX線回折法、顕微ラマン分光分析、電子顕微鏡などを用い、隕石中の微小鉱物の性質から初期太陽系の進化過程やその中に含まれる鉱物の生成メカニズムを解明する研究を行っている。また、このような微小試料の解析技術を生かし、装飾古墳中の顔料の分析、無機材料の評価などについても他分野との共同研究を行っている。

### 《所属学会》

日本鉱物科学会 (評議員、編集委員)、日本結晶学会、アメリカ鉱物学会、隕石学会、放射光学会、日本粘土学会

### 《研究資金》

無機結晶評価のための研究資金、株式会社麻生、270千円。

### 《研究業績》

#### 〈著書〉

ガンドルフィカメラ (in 粉末X線解析の実際)、中牟田義博、p. 74-76、朝倉書店、2009年7月。

#### 〈学会発表〉

- 1) Estimation of metamorphic temperature of NWA 2129 CK-chondrite: Implications for the formation process, Y. Nakamuta and D. Dogomi, 32nd Symposium on Antarctic Meteorites, NIPR, Tokyo, Oct., 2009.
- 2) TEM 観察によるユレイライト隕石中ダイヤモンドのグラファイトからの転移メカニズムの解明、中牟田義博、藤昇一、青木大空、日本鉱物科学会2009年度年会、北海道大学、2009年9月。
- 3) NWA2129 CK炭素質コンドライト隕石の変成温度の推定：母天体形成過程への示唆、堂込大介、中牟田義博、日本地球惑星科学連合2009年大会、幕張メッセ国際会議場、2009年5月。
- 4) Transformation mechanism of graphite to diamonds in ureilites revealed by TEM observation, Y. Nakamuta, S. Tho and T. Aoki, The 20th general meeting of the international mineralogical association, Budapest, Aug., 2010.
- 5) ユレイライト隕石中のダイヤモンドのTEM観察：グラファイトからの転移メカニズムの解明、中牟田義博、藤昇一、日本鉱物科学会2010年度年会、島根大学、2010年9月。

### 《活動実績》

#### 〈海外渡航〉

ハンガリー国ブダペスト、2010年8月20日～29日、奨学寄付金 (無機結晶評価のための研究資金)

#### 〈学外講師等〉

2009年度後期、山口大学理学部非常勤講師

#### 〈展示・催事等担当 (学内外)〉

総合研究博物館公開展示「昆虫のひみつ」、コーディネート、2009年7月。

総合研究博物館公開講演会「月の起源と進化、九州大学における宇宙研究」、企画・運営、2010年3月。

総合研究博物館特別展示「九州大学教育・研究の最前線」、運営、2010年5月。

## 宮崎克則 (みやざき かつのり)

Katsunori MIYAZAKI

開示研究系・准教授 (2010年4月転出 西南学院大学国際文化学部 教授)

### 〈研究概要〉

文献史料・口頭伝説・記念碑などを利用し、近世日本の民衆文化論を研究する。最近はシーボルト「NIPPON」の書誌学的研究を行っている。また、画像データの管理システムの開発とともに、学術資料の目録データの横断検索システムを開発し運用している。

### 〈所属学会〉

洋学史学会、日本史研究会、九州史学研究会

### 〈研究資金〉

科学研究費・基盤研究 (C) (2008～2010年度：代表) 「シーボルトが集めた『博物』資料のデジタル再構築」

### 〈学外委員等〉

- ①福岡市史編纂委員
- ②佐賀県東松浦郡玄海町文化財保護委員

### 〈海外渡航〉

- ①2009年9月2日～9月25日  
イギリス・大英図書館 イギリスにあるシーボルトコレクション調査

### 〈研究業績〉

#### 〈原著論文〉

- ①森 弘子・宮崎克則、2010. 天保3年『勇魚取絵詞』版行の背景. 九州大学総合研究博物館研究報告、8号、1-16.
- ②宮崎克則、2010. シーボルト『NIPPON』のロシア語版. 九州大学総合研究博物館研究報告、8号、107-128.

## 中西哲也 (なかにし てつや)

Tetsuya NAKANISHI

分析技術開発系・准教授

### 〈研究概要〉

日本の鉱山技術史を、科学的データをもとに体系化するために、国内各地の主要鉱山について現地調査や、鉱石および製錬滓の採取／分析を行ない、科学分析の結果を基に当時の製錬技術や採掘の対象となった鉱石について検証を試みている。また、江戸時代の銀貨である一分銀について、蛍光X線分析による非破壊定量分析を試み、分析法の確立と分析データの評価法について研究を進めている。

奈良の大仏に銅を供給したといわれる山口県長登銅山では、銅の生産が酸化銅鉱を原料とした製錬である事を明らかにし、銅製錬再現実験の学術的なサポートを行っている。研究成果の一部は平成21年4月に竣工する長登銅山文化交流館の展示に反映されている。

この他、福岡県香春銅山、鹿児島県国分銅山、宮崎県見立鉱山、檜峰銅山、島根県石見銀山、兵庫県生野銀山、明延鉱山、宮城県鹿折金山、涌谷町（砂金）などで現地調査を行い、鉱山資料の所在調査や、試料採取を行った。

#### 〈所属学会〉

資源地質学会、資源・素材学会、日本鉱業史研究会

#### 〈研究資金〉

科学研究費・岩手（B）（2009～2011年度：代表）「生産遺跡における製錬スラグの科学的分析と体系化に関する研究」

#### 〈研究業績〉

中西哲也、福岡県香春岳周辺の前近代金属生産、資源・素材学会2010年秋期大会講演集、139-140、2010.09.

中西哲也、愛媛県佐多岬半島の製錬滓について、資源・素材学会2010年春期大会講演集、企画81-82、2010.04.

中西哲也、呷拉宗遺跡製鉄遺構の理化学的分析、国際ワークショップ『東アジア青銅器・初期鉄器時代の諸問題』、2009.12.

井澤英二、中西哲也、本村慶信、酸化銅鉱製錬で生成する砒素銅と鉄塊—古代銅製錬復元実験の産物—、日本鉱業史研究、58、57-76、2009.09.

Tetsuya Nakanishi, Variations of the chemical composition of Japanese early modern silver coin "Ichibu-gin", The 7th International Conference on the Beginnings of the Use of Metals and Alloys, p.49, 2009.09.

中西哲也、蛍光X線分析による古銭の非破壊分析—現状と課題—、資源・素材学会2009年秋期大会講演集、企画、2009.09.

#### 〈学会発表〉

中西哲也、福岡県香春岳周辺の前近代金属生産、資源・素材学会、2010.09.13.

中西哲也、愛媛県佐多岬半島の製錬滓について、資源・素材学会、2010.04.

中西哲也、呷拉宗遺跡製鉄遺構の理化学的分析、国際ワークショップ「東アジア青銅器・初期鉄器時代の諸問題」、2009.12.20.

Tetsuya Nakanishi, Variations of the chemical composition of Japanese early modern silver coin "Ichibu-gin", The seventh International Conference on the Beginnings of the Use of Metals and Alloys (BUMA-VII), 2009.09.

中西哲也、蛍光X線分析による古銭の非破壊分析—現状と課題—、資源・素材学会、2009.09.08.

### 三島美佐子（みしま みさこ）

Misako MISHIMA

開示研究系・助教（2010年12月～准教授）

## 《研究概要》

### ① ゴール形状多様化の機構解明

ゴールの形状は非常に多様化しており、そのような形状がどのように決定・形成され、また進化してきたのかを明らかにしようとしている。

### ② 植物の倍数性進化と種分化

バラ科キイチゴ属、ワレモコウ属などを用い、交雑や倍数化を伴う種分化研究と生物地理学的研究を行っている。

### ③ 大学博物館のあり方に関する研究：アウトリーチ、科学コミュニケーション、展示評価、バックヤード、感性などをキーワードとして、観察と実践調査に基づき、大学博物館のあり方と、博物館における「感性」のあり方を探る。

## 《所属学会》

日本進化学会、日本植物学会、日本植物分類学会、(財)染色体学会、種生物学会、植物地理分類学会、日本植生史学会、日本昆虫学会、日本ミュージアム・マネジメント学会、博物科学会

## 《研究資金》

### 〈学外資金〉

旭硝子財団課題連携研究助成 (2010年度～2012年度：分担)「葉の形態および分光特性に基づく植物種同定支援システムの構築 (代表：松田修)」

科学研究費補助金基盤研究 C (博物館学) (2010年度～2012年度：代表)「学術標本 3D デジタル情報の、半自動データ取得システム確立と VR 展示への応用・効果」

科学研究費補助金基盤研究 C (博物館学) (2010年度～2012年度：分担)「博物館空間におけるユーザー支店からの展示評価の実践的研究 (代表：平井康之)」

科学研究費補助金基盤研究 B 海外学術研究 (2009年度～2011年度：代表)「常緑照葉樹を寄主とするゴール形成昆虫 (タマバエ類・タマバチ類) の適応放散の起源」

## 《研究業績》

### 〈原著論文〉

- 1 ZHAI SH-N, X-L YAN, K NAKAMURA, M MISHIMA and Y-X QIU. (2010) Isolation of compound microsatellite markers for the endangered plant *Neolitsea sericea* (Lauraceae). *American Journal of Botany*, 97(12): e139-e141.
- 2 三島美佐子・坂倉真衣・田中あかり・松隈明彦・岩永省三 (2011)『実践報告：九大博物館のホンモノ標本でチャレンジ！一見よう・描こう・比べよう！』九州大学総合研究博物館研究報告 No. 9：69-75.
- 3 坂倉麻衣・田中あかり・藤野理香・三島美佐子・岡崎正哲 (2011)『実践報告：「地球カフェ」映像と実験で体感、すごいぞ！「グラウンドキャニオン」』九州大学総合研究博物館研究報告 No. 9：77-82.
- 4 三島美佐子 (2010)「「ハコ」を持たない博物館—九州大学総合研究博物館— 実践学習・実践研究の場として将来へ」、西日本文化、第447号：70-75.
- 5 三島美佐子・平井康之・清水麻記・中西哲也・丸山宗利・南 博文. (2010)「九州大学における今後の「アウトリーチ」のあり方」、九州大学総合研究博物館研究報告、No. 9：43-48.
- 6 清水麻記・河野 央・平井康之・三島美佐子・南 博文. (2010)「大学博物館展示と来館者をつ

- なげる教育補助ツールの開発と効果」、九州大学総合研究博物館研究報告、No. 9 : 49-55.
- 7 平井康之・三島美佐子・清水麻記. (2010)「デザイン教育における博物館デザインへの取り組み～九大博物館常設展示室を活用した2008年度生活空間造形論・演習～」、九州大学総合研究博物館研究報告、No. 9 : 57-60.
- 8 三島美佐子・佐々木圭子. (2010)「2008年度博物館実習におけるサイエンスカフェ実習」、九州大学総合研究博物館研究報告、No. 9 : 61-65.
- 9 平井康之・三島美佐子. (2010)「九州大学総合研究博物館常設展示室におけるインクルーシブデザインワークショップ」、九州大学総合研究博物館研究報告、No. 9 : 67-74.
- 10 三島美佐子・佐々木圭子・加留部貴行・渡辺政隆. (2010)「ワールド・カフェによる科学コミュニケーションの試み「つどう・かたる・つなぐ～科学と社会の新しい関係づくり～」」、九州大学総合研究博物館研究報告、No. 9 : 75-81.

〈その他〉

- 三島美佐子 (代表) (2009)「九州大学博物館展示を利用した実践的研究—アウトリーチ活動のあり方と、大人と子どもの係わりを促すツール開発—」(課題番号19125)、平成19年度～平成20年度九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト種目B 2 (f 枠) 研究成果報告書 (67 pp.+ 資料41 pp.)
- 三島美佐子 (2009)「九大博物館の取り組みの紹介と、学術標本資料と一般の方々をつなぐ方策」In 平成20年度人間文化研究機構総合推進事業「パブリック・ヒューマニティーズの方法論：学術標本資料ならびに文化資源のネットワーク型共同利用から創出される学際的専門知と公共社会との融和」研究活動報告書 (73pp.) : 16-18.
- 三島美佐子 (2009)「アンケート調査のご報告」九州大学総合研究博物館ニュース、No. 13 : 6-7.
- 三島美佐子 (2009)「常設展示室へようこそ：その6 九大博物館展示室を利用したワークショップ②」九州大学総合研究博物館ニュース、No. 13 : 3.
- 三島美佐子 (2009)「平成20年度九州大学総合研究博物館公開講演会の報告 植物の世界～お花畑から遺伝子まで～」九州大学総合研究博物館ニュース、No. 12 : 8.
- 三島美佐子 (2009)「常設展示室へようこそ：その5 九大博物館展示室を利用したワークショップ①」九州大学総合研究博物館ニュース、No. 12 : 2-3.
- 三島美佐子 (2010)「油と三和土 (たたき)」In 百学連環—九州大学統合新領域学府ユーザー感性学専攻のご案内— : 31.

〈学会発表〉

- 三島美佐子・後小路雅弘・平井康之・藤 智亮・大鶴憲吾・豊田直子. 感性的展示の効用—特別展示「光が泳ぐ場所」の事例から—. 博物科会、2010.06.24.
- 平井康之・三島美佐子・藤 智亮・真鍋 徹. 大学博物館を利用したデザインプロジェクト授業. 博物科学会、2010.06.24.
- 梅田ひとみ・三島美佐子・大鶴憲吾・豊田直子・岩永省三. 九大博第一分館倉庫の新規活用—博物館への導入として—. 博物科学会、2010.06.24.
- 坂倉真衣・水野はるか・三島美佐子・飛松省三. 研究者の「子ども時代」に焦点を当てた展示の有効性を探る—「Qcafe サイエンスギャラリー」での展示を通して—. 博物科学会、2010.06.24.
- 徳田 誠、松尾和典、湯川淳一、桐谷圭治、三島美佐子. 伊豆半島および伊豆諸島におけるシロダモ

- タマバエの分布と密度、および、寄主植物との同時性の比較. 日本昆虫学会、2009. 10. 12.
- 三島美佐子、佐藤信輔、滝沢幸雄、湯川淳一. 寄主の葉の表裏で棲み分けるブナカイガラタマバエ（双翅目：タマバエ科）2型の生殖的隔離と起源. 日本昆虫学会、2009. 10. 11.
- 松尾和典、徳田 誠、湯川淳一、桐谷圭治、三島美佐子. 常緑樹にゴールを形成するタマバエ類の寄生蜂相—伊豆地方の場合—. 日本昆虫学会、2009. 10. 10.
- 新田 梢、坂口祐美、三島美佐子、小関良宏、安元暁子、矢原徹一. キスゲとハマカンゾウの花色の違いの遺伝的背景：雑種の表現型と色素合成系遺伝子の解析. 日本植物学会、2009.09.19.
- 武田悟史・松隈明彦・三島美佐子. 移入種オオクビキレガイ *Rumina decollata* の起源と移動. 日本貝類学会平成21年度大会、2009. 4. 5. 大阪自然史博物館.
- 氏野 優・松隈明彦・三島美佐子. 分子系統解析に基づくニッコウガイ上科における生息姿勢の進化. 日本貝類学会平成21年度大会、2009. 4. 4. 大阪自然史博物館

## 《活動実績》

### 〈海外渡航〉

- 2010年1月6日～17日 インドアッサム州  
 2010年3月14日～24日 インドアッサム州～メガラヤ州

### 〈学外委員等〉

- JST 平成22年度地域の科学舎推進事業「地域ネットワーク支援」：「Science for All Fukuokans ネットワーク (SAFnet) の構築～サイエンスモール in 福岡～」提案機関（九州大学）業務副担当（平成22～平成24年度）

### 〈展示・催事等担当〉

- ミュージアム横断ワークショップ：キッズ・カフェ☆「みんなの街をつくっちゃおう！」：企画運営（複数団体との共催）.
- 韓日現代美術展「おとなりさん。」箱崎会場：博物館側担当（AQAプロジェクトとの共催）.
- 箱崎残像—MACHINA—：企画運営.
- 子ども向けワークショップ「九大博物館のホンモノ標本でチャレンジ！—見よう・描こう・比べよう！—」於：世界一行きたい科学広場：企画運営（コネットと共同）.
- 九大博設立10周年特別展示「科学のえほんとハカセ達」：企画運営（統合新領域学府修士課程学生と共同）.
- Qcafe2010・九大博10周年スペシャル：企画運営.
- 特別展示「光が泳ぐ場所」：企画運営（QULTE との共催）.
- 公開展示「昆虫のヒミツ」：虫こぶコーナー担当（宮崎大学佐藤氏との共同）

## 丸山宗利（まるやま むねとし）

Munetoshi MARUYAMA

開示研究系・助教

## 《研究の紹介》

主にアリと共生する昆虫の分類と系統進化に関する研究を行っている。また、調査の遅れている日本産ヒゲブトハネカクシ亜科の分類、日本各地で絶滅の危機にある潮間帯性甲虫の分布調査、きわめ

て多様なマレーシアの甲虫相の調査などを手掛けている。

#### 《所属学会》

日本昆虫学会（編集委員）、日本動物分類学会（編集委員）、日本甲虫学会（編集委員）、日本進化学会、日本生物地理学会等

#### 《研究資金》

科学研究費・若手スタートアップ「ヒゲブトハネカクシ亜科の高次体系に基づく好蟻性種の分類と進化」採択年度（2008-2009）代表者名：丸山宗利

科学研究費・若手研究（B）「軍隊アリと共生する好蟻性ハネカクシの種多様性と種分化」採択年度（2010-2012）代表者名：丸山宗利

#### 《研究業績》

##### 〈原著論文〉

- Maruyama M., T. Akino, R. Hashim & T. Komatsu, 2009. Behavior and cuticular hydrocarbons of myrmecophilous insects (Tysanura; Coleoptera: Staphylinidae; Diptera: Phoridae) associated with Asian *Aenictus* army ants (Hymenoptera; Formicidae). *Sociobiology*, **54**: 19-35.
- Yamamoto, S. & M. Maruyama, 2009. Description of *Aleochara* (*Maseochara*) *hiranoi* sp.n. from Japan (Coleoptera: Staphylinidae: Aleocharinae). *Koleopterologische Rundschau*, **79**: 65-70.
- Maruyama, M. & M. Hayashi, 2009. Description of the intertidal aleocharine *Halorhadinus sawadai* sp.n. from Japan, with notes on the genus *Halorhadinus* Sawada, 1971. *Koleopterologische Rundschau*, **79**: 71-82.
- Komatsu, T., M. Maruyama, & T. Itino, 2009. Behavioral differences between two ant cricket species in Nansei Islands: host-specialist versus host-generalist. *Insectes Sociaux*, **56**: 389-396.
- Maruyama, M., 2009. *Rhinocerotopsis nakasei* (Coleoptera, Scarabaeidae, Aphodiinae), a new genus and species of Stereomerini from Peninsular Malaysia. *Esakia*, (49): 103-106.
- Maruyama, M., 2009. A new species of the genus *Merismoderus* (Coleoptera, Carabidae, Paussinae) from Laos, with a revised key of the genus and a new combination. *Esakia*, (49): 107-109.
- Maruyama, M., 2009. On the myrmecophilous genus *Losiusa* Seevers, 1978 (Coleoptera, Staphylinidae, Aleocharinae). *Esakia*, (49): 111-116.
- Maruyama, M., 2010. A new genus and species of myrmecophilous aphodiine beetle (Coleoptera, Scarabaeidae) inhabiting the myrmecophytic epiphyte *Platyserium* sp. (Polypodiaceae) in the Bornean rainforest canopy. In: Ratcliffe B, Krell F-T (Eds) Current advances in Scarabaeoidea research. *Zookeys*, **34**: 49-54.
- Ballerio, A., Maruyama, M., 2010. The Ceratocanthinae of Ulu Gombak: high species richness at a single site, with descriptions of three new species and an annotated checklist of the Ceratocanthinae of Western Malaysia and Singapore (Coleoptera, Scarabaeoidea, Hybosoridae). In: Ratcliffe B, Krell F-T (Eds) Current advances in Scarabaeoidea research. *Zookeys*, **34**: 77-104.
- Kanao, T., Maruyama, M., Sakchoowong, W., 2010. Two new species of Aleocharinae (Coleoptera, Staphylinidae) found in fungus gardens of *Odontotermes* termites (Isoptera, Termitidae, Macrotermitinae) in Khao Yai National Park, Thailand. *Zookeys*, **49**: 77-86.
- Komatsu, T., Maruyama, M., Itino, T. 2010. Differences in host specificity and behavior of two ant cricket

- species (Orthoptera: Myrmecophilidae) in Honshu, Japan. *Journal of Entomological Science*, **45**: 1-12.
- Maruyama, M., von Beeren, C., Hashim, R. 2010. Aleocharine rove beetles (Coleoptera, Staphylinidae) associated with *Leptogenys* Roger, 1861 (Hymenoptera, Formicidae) I. Review of three genera associated with *L. distinguenda* (Emery, 1887) and *L. mutabilis* (Smith, 1861). *ZooKeys*, **59**: 61-72.
- Maruyama, M., von Beeren, C., Witte, V. 2010. Aleocharine rove beetles (Coleoptera, Staphylinidae) associated with *Leptogenys* Roger, 1861 (Hymenoptera, Formicidae) II. Two new genera and two new species associated with *L. borneensis* Wheeler, 1919. *ZooKeys*, **59**: 47-60.
- von Beeren, C., Maruyama, M., Rosli, H., Witte, V. 2010. Differential host defense against multiple parasites in ants. *Evolutionary Ecology*, **25**: 259-276.
- Maruyama, M., Komatsu, T., Disney, R. H. L. 2011. Discovery of the termitophilous subfamily Termitoxeniinae (Diptera, Phoridae) in Japan, with description of a new genus and species. *Entomological Science*, **14**: 75-81.
- Kanao, T., Maruyama, M., Sakchoowong, W., 2011. A new species of Trichopseniini (Coleoptera, Staphylinidae) found with *Schedorhinotermes* termite (Isoptera, Rhinotermitidae) in Khao Yai National Park, Thailand. *Zootaxa*, **2748**: 53-60.
- Maruyama, M. 2011. *Pterorhopalus mizotai* (Coleoptera, Carabidae, Paussinae), a new genus and species of Platyrhopalina from Sabah, Borneo. *Esakia*, (50): 89-92.
- Maruyama, M., Ueno, T., Sakchoowong W. 2011. *Coenochilus thailandicus* (Coleoptera, Scarabaeidae, Cetoniinae), a new species of Cremastocheilini from Thailand. *Esakia*, (50): 93-96.
- Maruyama, M. 2011. New record of the seashore genus *Heterota* (Coleoptera, Staphylinidae, Aleocharinae) from Japan, with description of a new species. *Esakia*, (50): 97-104.
- Maruyama, M. 2011. New record of the seashore genus *Salinamexus* (Coleoptera, Staphylinidae, Aleocharinae) from Japan, with descriptions of a new species. *Esakia*, (50): 105-114.

#### 〈学会発表〉

- 熱帯雨林における生物種多様性指標としてのヒメサスライアリ、丸山宗利・小松貴・伊藤文紀・Rosli Hashim、日本昆虫学会第69回大会、2009年9月
- 日本産ミヤマヒメハネカクシ属 *Geostiba* (コウチュウ目：ハネカクシ科) の分類学的研究、千田喜博・丸山宗利、日本昆虫学会第69回大会、2009年9月
- 日本産ヒゲブトハネカクシ属 *Aleochara* (コウチュウ目：ハネカクシ科) の分類 (予報)、山本周平・丸山宗利、日本昆虫学会第69回大会、2009年9月
- 好蟻性ハネカクシ類における宿主アリ利用様式の多様性、北川雄士・丸山宗利・伊藤文紀、日本昆虫学会第70回大会、2010年9月
- マレー半島 Ulu Gombak における好白蟻性 Feldini 族ハネカクシ (甲虫目：ハネカクシ科) の種多様性と寄生特異性、金尾太輔・丸山宗利、日本昆虫学会第70回大会、2010年9月
- 日本産ハラブトハナアブ属 *Mallota* の分類学的再検討 (ハエ目、ハナアブ科)、弘岡拓人・廣永輝彦・丸山宗利、日本昆虫学会第70回大会、2010年9月
- 東南アジア熱帯雨林における多孔菌類食性甲虫の群集構造、山下聡、安藤清志、伊藤昇、片山雄史、川那部真、丸山宗利、久松定智、Piotr Wegrzynowicz、保科英人、市岡孝朗、日本昆虫学会第70回大会、2010年9月

クサアリ亜属 *Dendrolasius* (ハチ目: アリ科: ケアリ属) の分子系統と分類、丸山宗利、藤原希美、秋野順治、濱口京子、日本昆虫学会第70回大会、2010年9月

ウルゴンバックにおける甲虫相の調査、ならびに本小集会の趣旨、丸山宗利、日本昆虫学会第70回大会、2010年9月

#### 《活動実績》

##### 〈海外渡航〉

Taman Negara Bukit Lambir、マレーシア (2009年6-7月)、科学研究費・基盤研究 (C) (アリ類種多様性はアリ擬態グモの多様性創出の鋳型となっているか)

Ulu Gombak University of Malaya Field Studies Centre、マレーシア (2010年9月)、科学研究費・若手スタートアップ (ヒゲブトハネカクシ亜科の高次体系に基づく好蟻性種の分類と進化)

Khao Luang National Park、タイ (2010年10-11月)、科学研究費・若手研究 (B) (軍隊アリと共生する好蟻性ハネカクシの種多様性と種分化)

Cameron Highland、University of Malaya Ulu Gombak Field Studies Centre、マレーシア (2010年11月)、科学研究費・若手研究 (B) (軍隊アリと共生する好蟻性ハネカクシの種多様性と種分化)

Korup National Park、カメルーン (2010年1月)、科学研究費・若手研究 (B) (軍隊アリと共生する好蟻性ハネカクシの種多様性と種分化)

Cameron Highland、Ulu Gombak University of Malaya Field Studies Centre、マレーシア (2010年3月)、科学研究費・若手研究 (B) (軍隊アリと共生する好蟻性ハネカクシの種多様性と種分化)

Kaeng Krachan National Park、タイ (2010年10-11月)、科学研究費・若手研究 (B) (軍隊アリと共生する好蟻性ハネカクシの種多様性と種分化)

Ulu Gombak University of Malaya Field Studies Centre、マレーシア (2010年11月)、科学研究費・若手研究 (B) (軍隊アリと共生する好蟻性ハネカクシの種多様性と種分化)

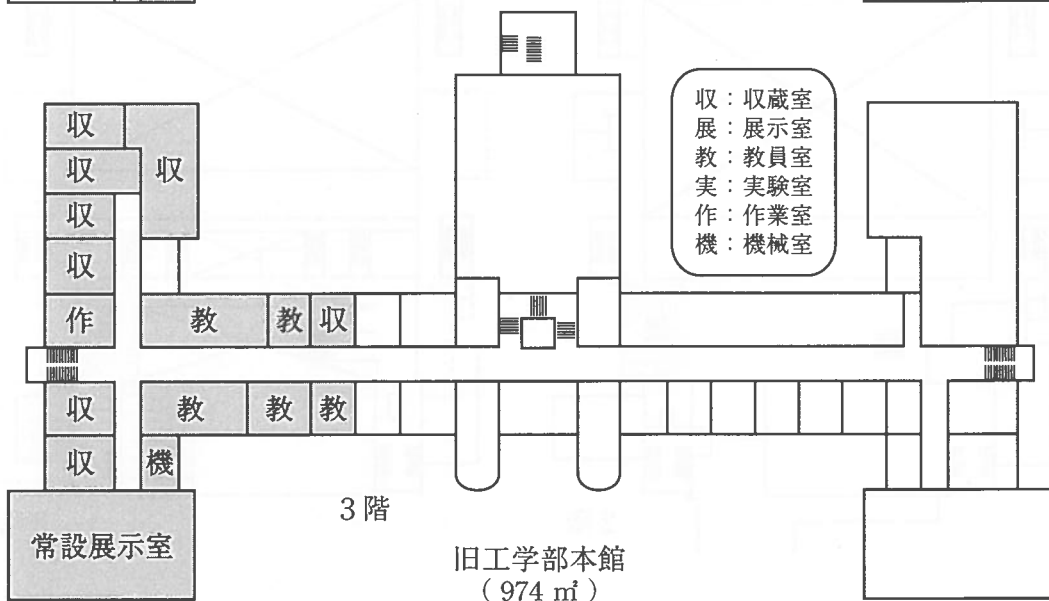
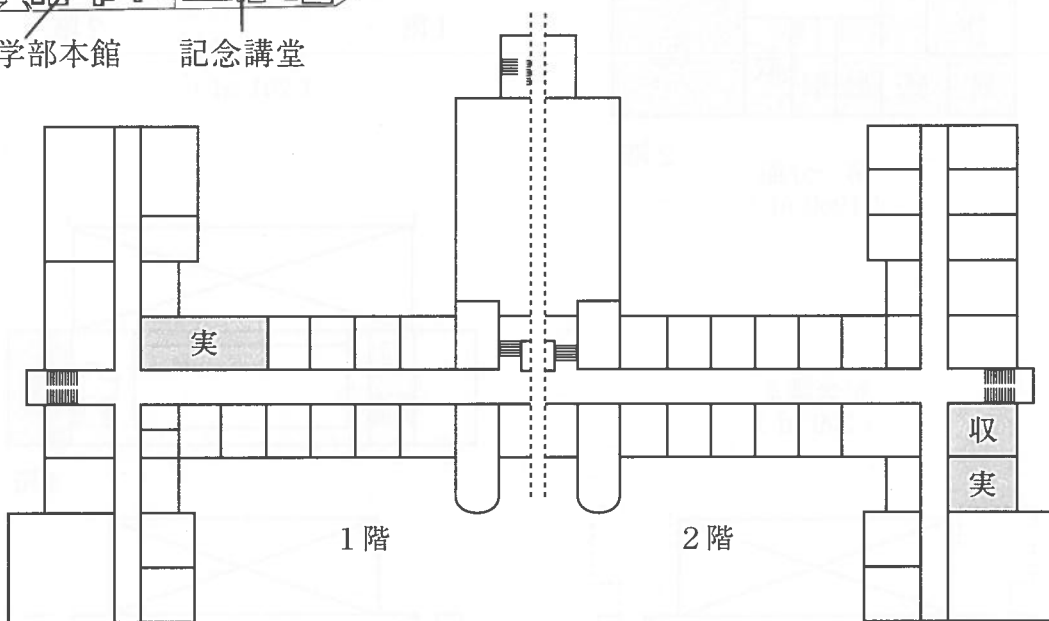
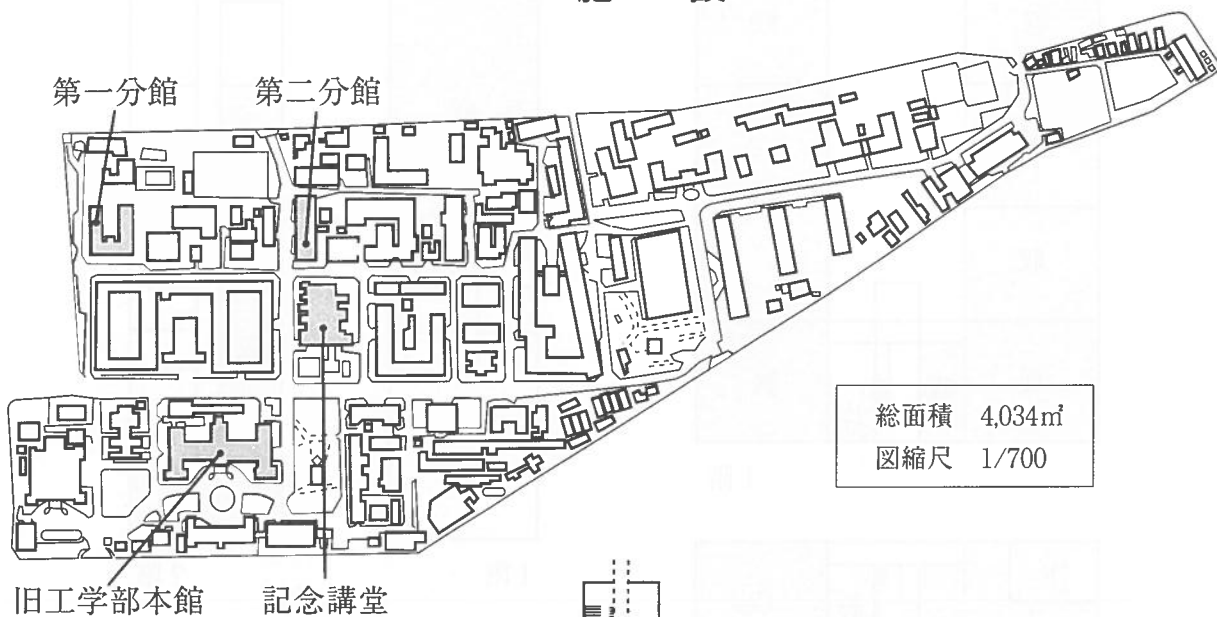
Hong Kong、中国 (2010年12月)、科学研究費・若手研究 (B) (軍隊アリと共生する好蟻性ハネカクシの種多様性と種分化)

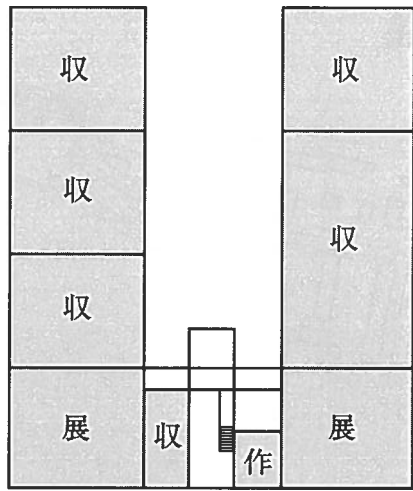
The Natural History Museum、イギリス (2011年3月-4月) 組織的な若手研究者等海外派遣プログラム (地球規模での保全生態学推進のための若手研究者海外派遣プログラム)

#### 《展示・催事等担当 (学内外)》

「ツノゼミの世界展」監督

## V. 施設



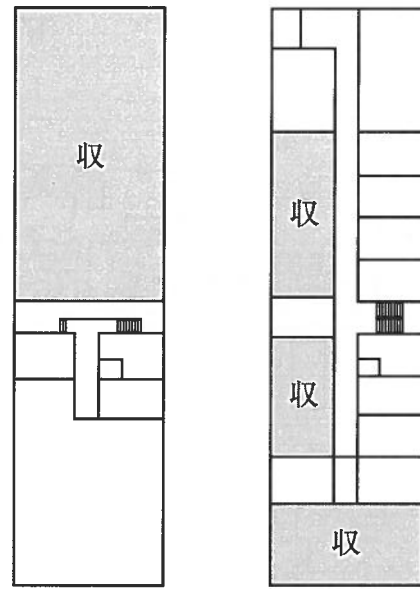


1階



2階

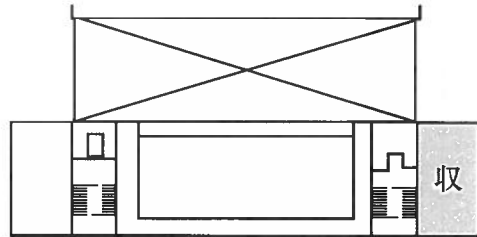
第一分館  
(1960 m<sup>2</sup>)



1階

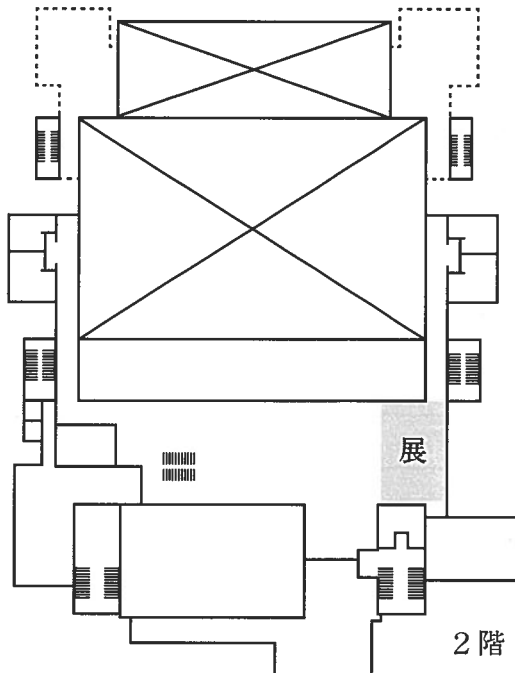
2階

第二分館  
(791 m<sup>2</sup>)

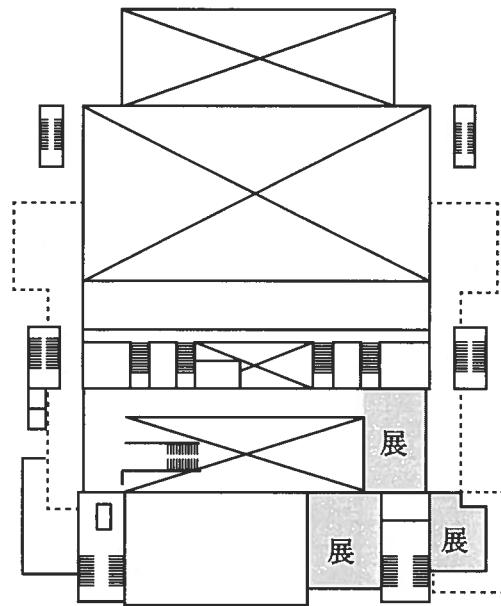


4階

記念講堂  
(309 m<sup>2</sup>)



2階



3階

## VI. 規 則

### 九州大学総合研究博物館規則

(趣旨)

第1条 この規則は、九州大学学則（平成16年度九大規則第1号。以下「学則」という。）第13条第2項の規定に基づき、総合研究博物館（以下「博物館」という。）の内部組織その他必要な事項を定めるものとする。

(目的)

第2条 博物館は、学術標本の収蔵、分析、展示・公開等及び学術標本に関する研究教育の支援並びにこれらに関する調査研究を行うとともに、学内外の研究教育活動に寄与することを目的とする。

(系)

(館長)

第3条 学則第26条の規定により、博物館に、館長を置く。

- 2 館長は、九州大学の教授のうちから第5条に規定する運営委員会の推薦により、総長が任命する。
- 3 館長の任期は、2年とする。ただし、欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。
- 4 館長は再任されることができる。ただし、引き続き再任される場合は、1回を限度とする。

(副館長)

第4条 学則第26条の規定により、博物館に、副館長を置く。

- 2 副館長は、博物館の専任の教授及び准教授のうちから館長の推薦により、総長が任命する。
- 3 副館長の任期は、2年とする。ただし、当該副館長への就任時における館長の任期の終期を超えることはできない。
- 4 副館長は、再任されることができる。

(運営委員会)

第5条 学則第39条の規定により、博物館に、博物館の重要事項を審議するため、運営委員会を置く。

- 2 運営委員会は、次の各号に掲げる事項を審議する。
  - (1) 館長及び副館長の選考に関する事。
  - (2) 博物館の教員人事に関する事。
  - (3) 教員の研究業務に係る重要事項に関する事。
  - (4) 共同利用に係る業務の重要事項に関する事。
  - (5) 研究員等に関する事。
  - (6) 研究生等に関する事。
  - (7) 博物館内の諸規則等の制定改廃に関する事。
  - (8) 博物館の自己点検・評価に関する事。
  - (9) その他博物館の管理運営に関する事。
- 3 前項第2号に掲げる事項のうち、教員の選考のための資格審査については、原則として、博物館に設置する教員選考委員会において行うものとする。ただし、必要に応じて、博物館の教育研究に係る

する部局の教授会において行うことができる。

第6条 運営委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- (1) 総長が指名する副学長
  - (2) 館長及び副館長
  - (3) 博物館の専任の教授及び准教授（副館長の職にある者を除く。）
  - (4) 附属図書館長
  - (5) 情報基盤研究開発センター長
  - (6) 各研究院（数理学研究院を除く。）の教授及び准教授のうちから選ばれた者 各1人
  - (7) 各附属研究所（マス・フォア・インダストリ研究所を除く。）の教授及び准教授のうちから選ばれた者 各1人
  - (8) 数理学研究院及びマス・フォア・インダストリ研究所の教授及び准教授のうちから選ばれた者 1人
  - (9) 理学部等事務長
  - (10) その他運営委員会が必要と認めた者 若干人
- 2 前項第6号から第8号まで及び第10号の委員の任期は、2年とする。ただし、委員に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

3 前項の委員は、再任されることができる。

第7条 運営委員会に委員長を置き、館長をもって充てる。

- 2 委員長は、運営委員会を主宰する。
- 3 運営委員会に、副委員長を置き、副館長をもって充てる。
- 4 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるときは、その職務を代行する。

第8条 運営委員会は、委員の2分の1以上が出席しなければ議事を開き、議決することができない。

2 運営委員会の議事は、出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは、委員長の決するところによる。

（専門委員会）

第9条 運営委員会に、専門的事項を審議するため、必要に応じて、専門委員会を置くことができる。

（兼任の教員）

第10条 博物館に、兼任の教員を置くことができる。

- 2 兼任の教員は、九州大学の教員のうちから運営委員会の推薦により、総長が任命する。
- 3 兼任の教員の任期は、2年とし、再任を妨げない。

（事務）

第11条 博物館に関する事務は、当分の間、理学部等事務部において処理する。

（雑則）

第12条 この規則に定めるもののほか、博物館の組織及び運営に関し必要な事項は、運営委員会の議を経て、館長が定める。

附 則

- 1 この規則は、平成16年4月1日から施行する。
- 2 この規則の施行後、最初に任命される館長及び運営委員会の委員は、この規則の相当規定に基づき任命されたものとみなす。

- 3 この規則の施行の際現に九州大学総合研究博物館規則（平成12年4月1日施行。以下「旧規則」という。）の規定に基づき、兼任の教員に任命されている者は、この規則の相当規定に基づき任命されたものとみなし、その任期は旧規則による兼任の教員として在任した期間を控除した期間とする。

附 則（平成18年度九大規則第51号）

この規則は、平成19年4月1日から施行する。

附 則（平成22年度九大規則第128号）

- 1 この規則は、平成23年4月1日から施行する。
- 2 この規則施行の際現にこの規則による改正前の九州大学総合研究博物館規則（以下「旧規則」という。）第6条第1項第6号の規定に基づき、運営委員会の委員として数理学研究院から選ばれた者は、この規則による改正後の九州大学総合研究博物館規則第6条第1項第8号の規定に基づき選ばれたものとみなし、その任期は、旧規則による当該委員として在任した期間を控除した期間とする。

## 九州大学総合研究博物館の教員組織に関する内規

### 第1条（趣旨）

この内規は、九州大学総合研究博物館（以下「博物館」という。）の教員組織に関し必要な事項を定めるものとする。

### 第2条（教員組織）

博物館に、教員組織として次の表の左欄に掲げる系を置き、当該系の任務は、同表の右欄に定めるとおりとする。

| 系             | 任 務  |
|---------------|--|
| 一次資料<br>研 究 系 | 学術標本の調査・収集、分類・保存及びその理論・方法に関する研究と教育                   |
| 分析技術<br>開 発 系 | 学術標本の先端的分析法による新たな学術情報の抽出及びその理論・方法に関する研究と教育           |
| 開 示<br>研 究 系  | 学術標本の展示・公開のための情報のデータベース化及びその効果的な展示・公開のための理論・方法の研究と教育 |

### 附 則

この内規は、平成19年度4月1日から施行する。

## 総合研究博物館資料部内規

第1条 九州大学総合研究博物館に、学術標本の管理、運用にあたる資料部を置く。

第2条 資料部は専任教員及び兼任教員で構成される。

第3条 資料部に自然史、文化史、技術史の3部門を置き、各部門に専門分野を置く。

2 専門分野は当分の間、以下のとおりとする。

自然史部門：動物・医動物、植物、昆虫、水生生物、地史古生物、岩石、鉱物、人類先史、有機化石、地球電磁気、生薬

文化史部門：考古、記録史料、建築史、カルテ資料

技術史部門：資源・素材、機械

第4条 各専門分野に分野主任を置く。

2 分野主任は、当該分野に関係のある兼任教員をもって充てる。なお、必要に応じて博物館の専任教員も分野主任となることができる。

3 分野主任の選出は、各分野の推薦に基づき、館長が委嘱する。

4 分野主任は館長の下に、各分野における学術標本の管理、運用の取りまとめを行う。

5 分野主任の任期は2年とし、補欠の任期は前任者の残任期とする。なお、再任を妨げない。

第5条 博物館に学術標本の管理・運用に関わる諸事項および各分野間の連絡調整を計るため、主任会議を置く。

2 主任会議は各分野主任および博物館専任教員をもって構成する。

3 館長は主任会議を召集し、その議長となる。

附 則

1 この内規は、平成16年4月1日から施行する。

2 この内規施行後最初に任命にされる分野主任の任期は、第4条第5項の規定に関わらず、平成18年3月31日までとする。

附 則

この内規は、平成16年11月22日から施行する。

附 則

この内規は、平成19年11月7日から施行する。

## 九州大学総合研究博物館フィールド・ミュージアム部内規

第1条 九州大学総合研究博物館に、野外における教育・研修支援のためにフィールド・ミュージアム部を置く。

第2条 フィールド・ミュージアム部は専任教員及び兼任教員で構成される。

第3条 フィールド・ミュージアム部に陸生生物、水生生物及び地学の3部門を置く。

第4条 各部門に部門主任を置く。

2 部門主任は、当該部門に関係のある兼任教員をもって充てる。なお、必要に応じて博物館の専任教員も部門主任となることができる。

3 部門主任の選出は、各部門の推薦に基づき、館長が委嘱する。

4 部門主任は館長の下に、各部門における野外における教育・研修支援の取りまとめを行う。

5 部門主任の任期は2年とし、補欠の任期は前任者の残任期とする。なお、再任を妨げない。

第5条 博物館に野外における教育・研究支援に関わる諸事項および各部門間の連絡調整を計るため、主任会議を置く。

2 主任会議は各部門主任および博物館専任教員をもって構成する。

3 館長は主任会議を招集し、その議長となる。

### 附 則

1 この内規は、平成16年4月1日から施行する。

2 この内規施行後最初に任命される分野主任の任期は、第4条第5項の規定に関わらず、平成18年3月31日までとする。

---

九州大学総合研究博物館年報  
Annual Report of the Kyushu University Museum  
第4号  
2009 - 2010年度

2012. 3. 30発行

編集・発行 九州大学総合研究博物館 The Kyushu University Museum

〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1  
6-10-1, Hakozaki, Higashi-ku, Fukuoka, 812-8581, Japan  
Phone/Fax 092-642-4252  
URL <http://www.museum.kyushu-u.ac.jp>

印刷 城島印刷株式会社  
〒810-0012 福岡県福岡市中央区白金2-9-6  
Phone 092-531-7102  
Fax 092-524-4411

---